

雙魚書雜錄

二

明治卅二年八月上浣起筆

特別

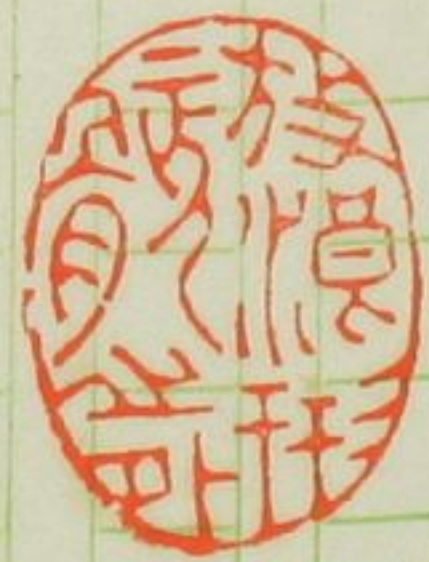
14

1919

241



國書刊行會



38- 9053

復魚本補録 二

塩原の六日間

〇年々三伏の暑候に小児をつんを避暑避暑の自給
 出さけるがこの兩三年の例とさうな居る、小児等
 と糲糲得格のこと々心得、其の季節即々さうして、
 要求して已まざる、差し繰りあはる用、あつ
 て、鹽原家々居るとえとい兼つたる時も無い
 てもさういふ、この要求が激烈なるが、ともて制
 し切らざるが、今年も避暑避暑を出さけること

にあらん

○僅うそくも兼温も依りいとまお米の涼味を
取しとる遠く是をさしあふ不兼の右候を拂
つて一室二室の家族を押しこえ不自由の
生活もかり窮屈の思をさしつらうしと家もあ
る傷り物と云ふ人もあつて保し
を構ひ危度く市一産を遠ざかう何不進るま
境界なる人の言ひ叫び陋屋に在りて家も在
り限り来客の杖の意接るに殺すも有りし
と境界の人と云ふ通用せぬ論心ある

○繁刻る俗務の煩ハさう身の累も重し
まゝの事業解り易きを要し
あそ尖角を解くると二の次び才一人を解
くるとし暑熱を思ふとんとつとよつと七言
る俗務を忘らん為也うらさう人又来らん
かき俗事一にに殺すもいふ暑熱を
覚ゆしと云ふ一此の尖角を三伏の日暑熱
七格へ雑く感ずる

○たうしき境も在る身を兼りし外
在ること多う家も在るも子世と云ふ

幸しと飲食を興ふるも稀んるも去んは家
 族を平へて成りてつらう日を初めて家族の固
 柔を承つてつらう日也 此の人もつらう為すの用も
 うゝ萬端の務を脱して終日子女と相話し相笑
 ふこん平素感^り存つて團聚も缺くの固柔を
 外らつて償ふ也 順逆まことと顛倒ぬる得
 るんも吾境過^り來^り事^の如此^のきを存め
 せん

○可成ハ一家を承けて出づけとて思ふ去んと家
 と宜ふも不安^{なり}と妻と之りつも留守長と

能^くいふ事と曰く家^の主人^は客^{來り}家^の
 子女^はは^り目^のつらうと云ん方^は暑^氣地
 づらしと暑^も平^に此^等の較^めんは言^の
 是^らと恰^もも余^の口^は真^似と為^すめ^り云^ふ
 ふこい^に於^てらん^の子女^を付^け出^す日^と妻
 小^さな家^の留^まる^を例^とし^て妻^の留^まる^に氣
 の妻^の後^ろん^とも其^の實^は獨^居之^妻の避^日也
 妻^の養^育子女^と世^に傳^へる^にも煩^累を脱
 して家^を在^るを喜^ぶ也

○避暑地を選定するも毎年の難問題

毎年一回しゑる行きとも興味を失ふ事
は便利もまた日量せざるを得ず海濱へ行
か一部の小説の体もさういふ一部の小説もさ
うか、すくなくともその地を生怪麗なる交へん
満しとて其のめりたる地をめぐり百石の末
漸しく決しけり野の塩原！

○塩原も汽車半日、更しく五里の道を行
うる可く、一行六人の内にも病状あり、穉児
あり、旅程の長く長きも失する趣あり、況ん
や涕甚盛の故りの清たる、往後二日を果し

旅をも随つて其味もあつたり又少くも旅りも
をいへ評せしめはぬ、利もさうさうと選立
と謂はん、然るも味もさういふ計りあり、おと存する
この、未見の地なる塩原、その多々の價と
拂つて辭せざるも、趣味の、いふ存んことを
期す也

○八月六日 此朝終る塩原りの程、上へ上野
へ一費汽車、午前五時四十五分也、おびい出
る、いふ、軟中、起き、懸、思の至る、
ちりとも此の汽車、乗、後、
日没、甲、淡、

其の塩屋を過ぎし能くがぬむ七時開る物をも
て之厄入るるものらんをいひ昔々に従ふて朝の
しも志はくをり、そこへ上りて杖をもちて
汽車へ入投しぬ

○上野より下車驛西那須野まで、うらむる
ゆも通るし、その^{早稲}味^のあき果てに
る所、^東路^の此れと朝^のきき車
中一乗客充滿にして飽飽を剩せぬ^{せんは}不愉快言
ハ人方多く、昨日の行程下りば、^{十一時過ぎ}ハ
○^{西那須野}西那須野^の西那須野^の西那須野^の西那須野^の

朝より車中も賑はし生憎強烈なる驟雨
降り、車軸を流し雨を冒して倉皇
車室を飛び出しぬ

○西那須野ステーション附近の七つ茶店を走りこみ
十二時ころまで一時雨をあませしむ
さきうき午一餉志は、あへき所々へと云は、
ハ午舟中を中食をとり、膳のこの一口は遍る
物もたると車中も能くそのいまもまが
この荷物もいれ出せと少供等々余りも
之家へ置えりおし、^{荷物の内なる}

と云ふ、何人の事かと為物拵の二男を責めたる
事論を、直ちに責めたるをのきをせしめ
急送をせしむ

○午餉七果し雨も霽んたるといざ行かん乗
合馬車一基を借り切り、いざ行かん乗
ハ所謂の田太郎馬車、いざ行かん乗
ころ、^{姓年}行抵終りの際、いざ行かん乗
馬車に乗る、轉覆の厄もさく思ひたること
あり、其言なりぬき、いざ行かん乗、小供等も
初めに乗る、いざ行かん乗、打よろこび、末世の

ことき、家庭のあつとひとしく狂ふ、我も
いくれい、遊しい、いと怪叫する

の乗合馬車、いざ行かん乗、いざ行かん乗、
つゝ、いざ行かん乗、いざ行かん乗、
切り他人申し、いざ行かん乗、いざ行かん乗、

いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、
いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、

いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、
いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、

いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、
いざ行かん乗、いざ行かん乗、いざ行かん乗、

らんを滅したる法ありと今更らんをせりといふ
 ○唯に氣遣ひしと道路の果て果て馬車
 をせよとていふ所やううが縁起のおもむ
 りしと道路の傍うまうの僻土を不思儀
 なる勿体ありと感せしむる教をひそぐれ
 う一事をさうし聞けば例の三時通に度々
 年一死を修めたる道徳の此の僻土に個體
 の道を開くにあつた民怨を根きし七理の
 とう保し三時の豪傑の士、又と土民の憤怒を
 三時とてか未来の謀を為す、今も於て土民の

三時を出発し、さうして印ち棺を背負ひて事定
 まる者、その車上馬車の担合をわくの愉
 快を感ずるとさう、三時おぬ令の切葉を賞款
 することを禁じ得やうと

○驟雨折々来つて車中の一行を驚かし、
 と瞬時にあふきを止め、二時河むらうを
 と戻出とさふ志原の驛へ進し、爰も人馬
 七小憩し、雨を衝て行くこと三十分むらう
 して大隈へ進み、こゝに塩原の関川とさふ
 へき所、西那候より、
 関谷の驛へ進み、
 西那候より、

配あつても比らうし上りるうが関めくくく句
配漸ゆく急うく山を愈々洋く、句配の急と山
の深さの比例して景色をまうく高々大綱より二
十町より終る福渡戸の遠うえの塩原の口
パー、まゝある

○関がらも福渡戸のあつた間の景色も雨申るう
く余もして是非幸の快樂を思つてくくし大概の味地
を再境くくも評ら流るるを例し、其境を
見し失記すること等うくく此地の風景を
来らうがくく俗人の評を景ある不奇くく

さう又多く趣味を存し老人をし車の上をく
快哉と呼はしめく

○塩原の景色を概括して云くは常川の水が
の七八分を岸より岸まで小形作つて流るとその
源は北川と云く源を高原山にありし塩原を

横断して流る瑯珂川に注ぎ敢て大川と云ふ
あつても都人す之唯は日前年織道が橋の
尾に就き川名をわくくくきさんく北川の寺
勝は塩原の山間を通りくく関の集ま
雄虎の周囲の屏立てる数々の山岳と相応

一層の故を添ふ
相和して大身勝を現すと蓋し造化の旨と
作る市置安排の流るる
に於て自取し得べきありあや

○其書より塩原と望市川と軸とを展開せる

地よりと洵と然り此郷ありとしありある深帯

と流るる流るる州を其の流るる流るる

と流るる流るる或を激し或を頼り列るる

境と流るる故を異し其の致千殊葉

陸或人の端倪を許さるるありしをんは塩

原と山郷とをのり水郷とをのり表し織

きもそんを官軍より御とをのりあるを思ふ

○此境に来り聯忠憶起を禁し得るいのちを存

時に葉に山人の全も松又をそのありて

人公を殺すの地を造りおのり終る地を

く地を相するに二日あり

るを授け漸く所を得るを

市に全も松又を後流るる

を流るる流るる

を流るる流るる

し殊る此地の山を言し

所ハ画千七及

心難き如くあり、今もぬき抜き、
其の故節を抄し、
代末へんむ

進み、関谷村より利んは人家のまゝ所は深々の
響きあり、之れを架んと入橋とあり、即ち橋
を渡ると倦むま行けば日克直つて山層々
嵐も冷く、壑深く隔りて、或廻りて、葛折の
後々と密林の響きの呼び、前より速き安の
の花を登き、
し流の水上は浅く、
の雷白を、
もの花を、
うしと或條も、
の珊りしと、
てあ清く、
車を馳りて、
は三十尺の、
奇ろく、
あり、
の月又

の雷白を、
もの花を、
うしと或條も、
の珊りしと、
てあ清く、
車を馳りて、
は三十尺の、
奇ろく、
あり、
の月又

井七が福清戸入村の多々見丸は柳川橋也

北内々やあんと御ある川はそんと塩原の地

端まきまた二十町もあると謂ふて一帯を喫し

塩原郷の温泉道の廣きことを云ひたり

○福清戸より柳川橋所在地古町まで約二十町也

より監査全温ありて畑下川浸ありて須見温

泉あり門前温ありて皆一帯の言ふ事也

是も自々小部落を多し畑おのつて多し

級あり湯泉又種類不同し而して人烟の家

と浴客の多きを論ずれば福清戸は郷中の所

ありとまよがぬし同所第一の旅館拵屋を浴

客三百人以上を容るゝと云ふ

○柳川橋を古町の端にあり規模の大を拵屋の

ふかす地味静しと家構又蒲酒、確り

此一帯客の旅館より聞けば東京の里を拵屋

の柳川と云ふる骨董高の別荘在りし、もとま

願客を限り宿泊せしをなりのりて人々をこ

人と代り易く日專旅館を門と云ふことを成る

と場所、勝るなる建築なり

○橋を蒲酒より多し浴客客元填の折柄、

突如入来の六人客の過當の室を〜と主人の
 断りも道理、車も去りとも他の旅籠くも
 行へん外、外へ行きさう〜とよき室のあつと
 も限らぬ心にも〜部屋ぬ〜とぬを條
 件として馬車〜とぬを扱てあつらんなる
 室を西日の赫々と〜こといふ學士二點の
 副いりたる二間、山の〜とぬのさう〜とぬの
 更〜とぬの油度萬端もすく〜部屋おぢ〜
 とぬのえがやん〜とぬのを浅〜ぬ
 ○主人の挨拶も来ん〜とぬの補〜、前刻〜

部屋ぬ〜とぬと〜とぬの狭く〜とぬの身動
 とも〜ぬ仕末折角保養も来り〜とぬ
 部屋ぬ〜とぬの窮乏〜とぬの甲斐気
 と〜とぬの部屋ぬ〜とぬの内、フト此家
 の〜とぬの〜とぬの思ひ別り、若〜とぬ
 念の授けぬ友人の〜とぬの出来〜とぬ
 思〜とぬの漸やく我と折〜とぬの何と〜とぬ
 をみ〜とぬの御あ〜とぬの〜とぬ
 して〜とぬ

○~~森~~方あふも海み又餉も果てぬ名所給えり
きい鑑々葉を取り東京く着報を出し終
らんぬ、おさまき子供共を川へあかしく
きとらうしと切りよよろこびホくくこのひあ
るが部屋が改まぬ内を自分は氣のう氣を
る〜既又塩原の地を在りる〜塩原の未
ゆに氣なるんまゝ、その内又目を遠慮する
善人果て、金々持る飯入るうら
○六畳とある六人なまゝ二畳とあり添うらした
る〜ともそこを為めを置るゆふるゆ

一 無論人の存る面積の敷々入るぬ床を
のこし見んは寸尺の飯地もろ〜一行ありらさ
らうと持るゆ物をも完わいを押しとごと
くである、おまけに病も七部屋お庭ひよろ
〜無い、川橋子の所謂、旅籠屋とある
い定〜も重い板しび、自合文と記して
特別の夜具と注文する〜比、物に
屋と其人お庭の待遇をする〜と云ふを理屋
ひび、実と其の部屋お庭の待遇をする〜
その方から實際ひある、一旦已らぬ一室く押

一こめえんといひ最後、潤を~~曉~~むも膳部ひも初
 具びもえんといひつる。この心、~~事~~部座を二等
 九が待遇を一等と云ふ譯、~~事~~ゆゑ、~~事~~えん七廿元
 金銭に打算し、~~事~~等級の定めもあるのた、~~事~~
 死しもまい譯もも~~事~~見~~し~~、~~事~~旅をさせよの
~~事~~古法を真向の服膺せんといふは、まこ
 とお眺むの寸法も人も、~~事~~愛見の旅の
 事、~~事~~経験をさせるといふ見、~~事~~改の~~事~~
 を使の~~事~~のある自分が折角保るる来て其
 のおつき金をするの事、~~事~~どうも感心出来ぬ、
 と接する、~~事~~おとすべく、係し、~~事~~疲方と云ふ
 とも或る場へるを調法の、~~事~~この心子女を勿
 論、~~事~~執つと直ると、~~事~~やくと眠り、~~事~~
 七、~~事~~煩悶せよ、~~事~~車、~~事~~睡郷へ入つて

○翌朝早起き、~~事~~真候村を捨て、~~事~~えん七十二分
 車、~~事~~えん十五分の差ある、~~事~~知おらぬ人乗り
 十二日以後約束ある、~~事~~室あると十二日まひりて、~~事~~甚し
 ころ、~~事~~えんはえん、~~事~~に移るとも、~~事~~りつると即ち其
 言と捨つ、~~事~~常市川を隔る、~~事~~山入、~~事~~日、~~事~~遊、~~事~~ハ
~~事~~昔の未、~~事~~魁の副、~~事~~い、~~事~~い、~~事~~あ、~~事~~さ、~~事~~り、~~事~~眺、~~事~~中、~~事~~り

いさよふハ船の跡をたづねて二階はま
りて床のまをひきさく侍はあし戸を推して入
り前曲一帯の築川を隔て山を動かし眺め
まことまは也ま入曰く此の二重の間代一日三回也
三合の膳部が一々清思を傳へて承り調
理すべく夜具も余のまも也と一議及ハす
直ち福轉の決し吐嗟引越しを行ふ子
女等と漸やく序々眺めよき[○]家[○]の福[○]
くると喜ぶこと長しくまゆも志きらるゝと
さまのつまは清在をうと問ひうけ清在の一
日も長うんことを祈らる

○此の室の物置を板前の境邊に比下人は殿控
と下郎の[○]名[○]ある勅任とあ任の[○]事[○]ありし
漸かく心怠りき皆又塙原のまよき所と賞
し出地の評判もよくよく成りたるもあり
しおさまき子供も前川の浅く且つ舟の
清き[○]をえてまよき眺めたるだけか満足
さう難く馳せし川をあらざぶくとかろこ
たりさると打興し男の子もまよきまよき
揃くて揃ひあはせし[○]松[○]葉[○]の

打退しあきまき草花を取ると山ふけの上
七あま、あんな三三の昔筒とあんなん果ん
奈凡々々身を浴びせて読書ニ味を耽る
由りつし、睡りてめづりぬめのゆり来りお
さらく入るるに起き来んは五体のんい
りして初めし初め地の後夜を感しぬ
偶々一室をかりて園根正直の事りありしを
全し落天す

〇八日晴元五のひらき時起きたり、朝の冷暴
晩秋のこころ草花一枚をとりて清くきりぬるに
秋のこころ草花一枚をとりて清くきりぬるに

寒暖計を捨てるは七十一日也此地を日中と
早もハナ方位りしてハ十二が上ること稀に
まうとまうり二三の古信を東京のあつして後地
行をたしつゝ二時官の事す、供み来り子女を
柱して散策、二位宿逆村を訪ぬる也此地の
花所とする所なんともえらん是を総して土地は
仔細くしつゝ云へるやう在所無窮たりといふも
うき所のまき、このころ凡そあつことまも某
山某水某のあつらんこと花のつけある所より却
つて俗衆の目をつゝんるもまき所を村拖り出

しよののちるある、帰途路傍の草花を
折り来りてえを床に挿み置たり

○六日(き)劇根に互車をくゆりて来り
て別をせり、あつたよりし来給たりし午の

貝の寓所ぬ雲寺、此の地寺を平重盛の
姨母ぬ雲尼の草創の傳と傳ふ塩原才一の

右利のし門前を去り、あつたよりし又鹽原
の島一家を授けて此の地を治むるを例と

しと年七來りてを治むる、有智の母長言を奉り
孝院二宮を以て後備太子に授けし而も一ヶ月間代

四十五田を拂ふと聞き、一節を樂しむる
前尾張伊勢、日向を治りての事と打聽り

ひ辭しよふ、見ゆるを治りてを治りてを
大城を授け、白雲洞を治りてを治りてを

みたりてを治りてを治りてを治りてを
○九日、此の起床、寒候計七十二分、九日の

此の氣候、子女のあつたを従て、とて
此の氣候、子女のあつたを従て、とて

を又んを宿を出づ、前の馬車にて行り
とて、御中の諸字を徒出し天狗岩を

三峰直下、石の碑と見え、白雲洞橋を造り、一州記念
撮影を可し、左折して山に入ると、いんくく龍心
瀨道、丁ひくも密林、天を蔽ふ、昼晴く怪
巖人、二過りて下り、溪流あり、^井架す、^井橋
橋を以てし、僅く一人を渡り、更く架橋を築し、屈
折して行く、橋窄の一人を僅く一人を通す、過れば
動揺して危ふるけく、此間の風景、完く、唐画
の山舟を聯想す、恐ろしく、深々、聲あり、^龍橋
り見れば、飛瀑あり、青い、高き、うらうら、^龍趣あり、又
行、屈折して、ぬる歩を行く、又飛瀑あり、更く、行

く、こゝ數十歩、^龍一、大飛瀑を得、こゝ所謂
龍心瀨、塩原七名瀑の一なり、^龍瀨、^龍五、^龍獨
木橋を築し、^龍つ、^龍瀑下、^龍利、^龍を得、^龍一行
皆、^龍ふ、^龍飛沫、^龍雨を、^龍撲ち、^龍肌、^龍が、^龍ぬ、^龍粟を、^龍生す
凄絶冷絶、^龍兎、^龍下、^龍橋、^龍撮影を、^龍試む、^龍但、^龍比、^龍兎、^龍病
あり、^龍氣、^龍温、^龍刺、^龍灸、^龍の、^龍為、^龍め、^龍心、^龍胸、^龍痛、^龍を、^龍感、^龍ず、^龍又、^龍し
く、^龍留、^龍まる、^龍を、^龍不、^龍可、^龍と、^龍し、^龍乃、^龍ち、^龍奴、^龍の、^龍帰、^龍途、^龍に、^龍就、^龍く、^龍此、^龍境
幽寂、^龍紅葉、^龍の、^龍候、^龍殊、^龍々、^龍風、^龍致、^龍あり、^龍と、^龍云、^龍ふ、^龍人、^龍の、^龍瀨
^龍境、^龍の、^龍趣、^龍あり、^龍と、^龍云、^龍ふ、^龍す、^龍
○九日(き)午後、^龍東、^龍の、^龍山、^龍に、^龍初、^龍め、^龍し、^龍或、^龍道、^龍の、^龍あり、^龍す

信着 買き忘るる食物もしくも学換しくも
七未る、有賀夫人来訪、夫人と一ツ橋大正時代の
亡友丹乙馬の妹也丹天才あるも因忘りるめる推
重でゝ不幸一木も木と業をも卒人丁とて設
才屈指するは既二二十七八の早稲を託して
有賀夫人と戀を詠して別る

〇相も入る有賀夫婦一未訪あるも有賀回く君昔
量故味を解す清一物を示さん目と三人と
なし其の除花する所の高尾の木像を示さる
像と初代高尾の之姿を刻しとて高尾

ゆい寸短女容貌状は南の式なるもい七も
柳さくし包らるる金銀五彩の糸を以てし過し
く裂んとて以て高尾衣服の断片さくると
ふ又添わくは像の大ききとて扇を以
てし細字を志しくい諦視するは一首の和
歌あり即ち元政う高尾の一首七言の歌也
歌あり

ね留ため也猶古里須摩仁通登茂
関不表紙蒲風奈良奴身波 元政
外は高尾千澤の金時存り柳二枚を添ふ

様式あり、より、より、古色、より、高尾の寺、
澤、より、より、取、難、

右三品を盛、より、より、持形、の、髹漆、の、器、を、以、
て、此、器、元、禄、の、雛、の、用、に、し、り、の、
う、由、の、所、并、に、無、物、と、し、る、物、巧、を、捨、め、極、め、
古、雅、愛、す、べし、

此、の、器、は、海、中、の、名、家、の、画、説、を、集、め、り、一、
巻、あり、し、中、に、此、の、器、の、由、来、を、志、す、す、即、ち、左、
の、如、し、

余、近、時、得、高、尾、之、本、像、古、も、最、可、愛、な、手、圖、

扇、有、之、雅、刻、意、以、寄、多、系、像、字、讀、え、ぬ、初、に、

相、も、た、り、也、殆、古、く、得、意、に、通、ず、る、に、

似、不、堯、城、留、風、存、良、奴、又、波、え、ぬ、

再、後、親、山、白、山、人、所、著、轉、政、少、弐、山、人、志、文、以、

初、之、人、其、中、一、有、高、雅、像、圓、及、元、以、初、刻、其、

圓、と、余、本、像、尺、寸、但、と、を、異、人、今、納、圓、之、併、

録、之、し、 甲、申、秋、

畏、三、也、須、原、頼、二、説、

畏、三、也、之、概、の、接、の、お、お、ま、ま、と、此、接、と、今、の、

身、入、り、ま、す、即、ち、ま、ま、お、お、係、を、し、此、接、と、今、の、

かゝるうと

北島浪山東京信の改をたうしこの後行

おのいせ集り年うつし終る農事の年

後うなる由行おあま果る下の改中りあ

王

詠の元寶 柳川精と呼ぶ事尾と多ののあうを流

んや仙景高尾(三代)と増原の出と此の事尾流

北地うあま、北橋をたうる事尾の終る不謂るん

井高尾(初代)を一人同じうの事も、柳川橋の

口付りをもたむかゆのうと謂ふも可也、今さら

と尋流下たうるあうりーきさうおーりもた此の流

の詠味あうるも元か也 志散る後欄の悲なり涼と

納る偶々十数前川の男女燈を提けお中へ登り歩し

と魚を捕らと見ると燈えおの映しと奇趣あうる

子女手を拍うるとよろこぶ

の十日、晴、五時半起床、気温七十五度、朝お

後葉入親しむ、此の舟御来てうう数りあう

舟の詠味をえお、百水一言を葉せんと思ひ立

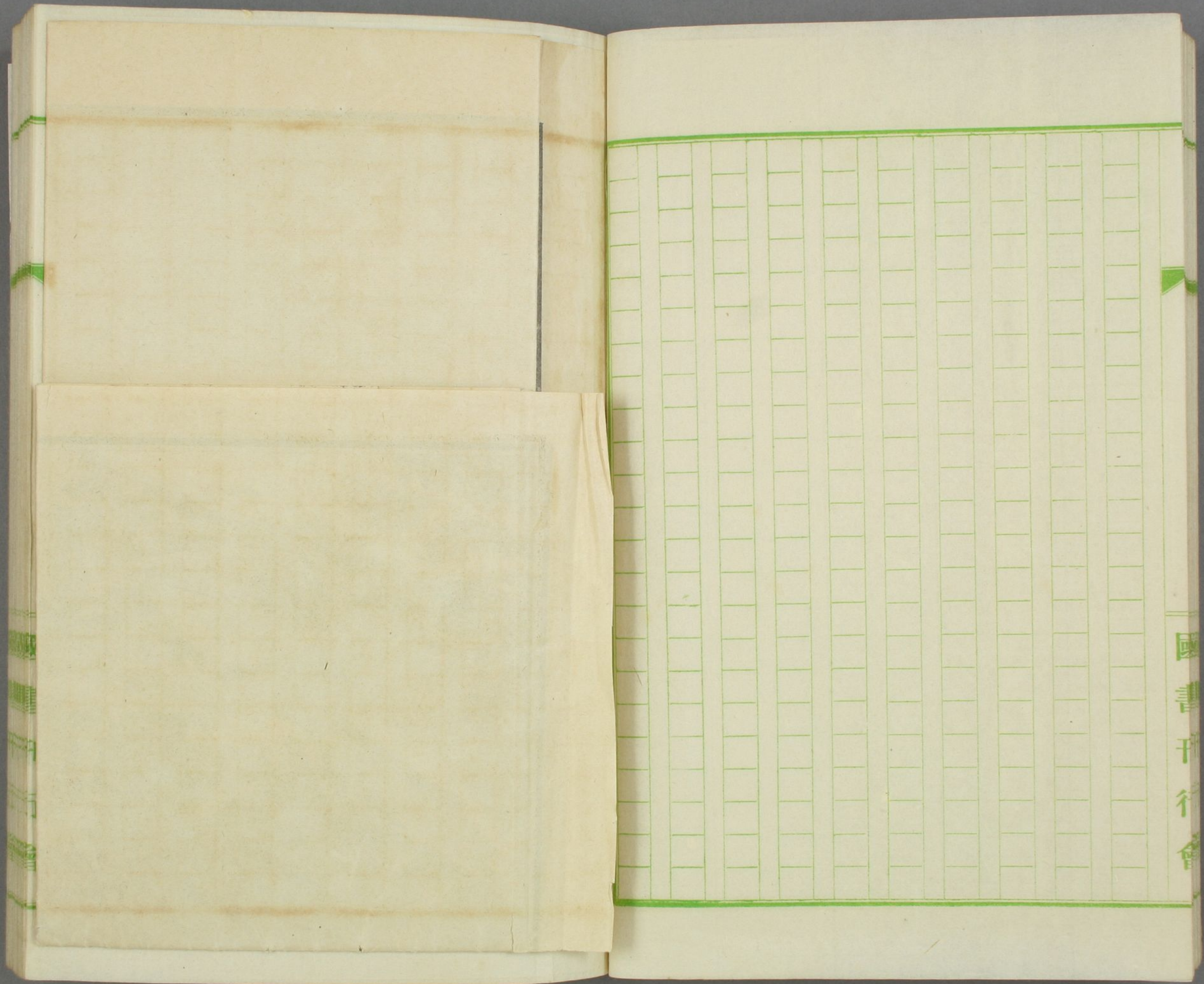
つ、執筆三時前、三十五條を葉して罷去、此

の紀行の次きと揚ぐるとこの即是ん

男機病氣の却念ふも先客の家へ歸らんことを欲
す乃ち昂と共に還す。有賀夫婦へ佃煮一函
を贈り返礼をせしむ。午知衣のふしと袴と
坂本三郎昨用公用と當分来んりと来河
ち二時河をい談笑して去る。東京電ふしハ
供くお伽歌等を贈り来る。市中へ散策して
此地をゆく。化五五袴を贈る。正午氣温八十五
度涼在中一最も高度也

州相帰京より松入の^{音聲の}期三とぬす伝廿七
餘の経後迄あり余代等と合算するに百十

約四より一擲の涼味を購ふに不慮あり
○十一日



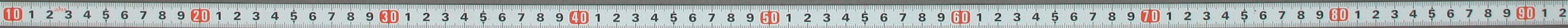
國
書
刊
行
會

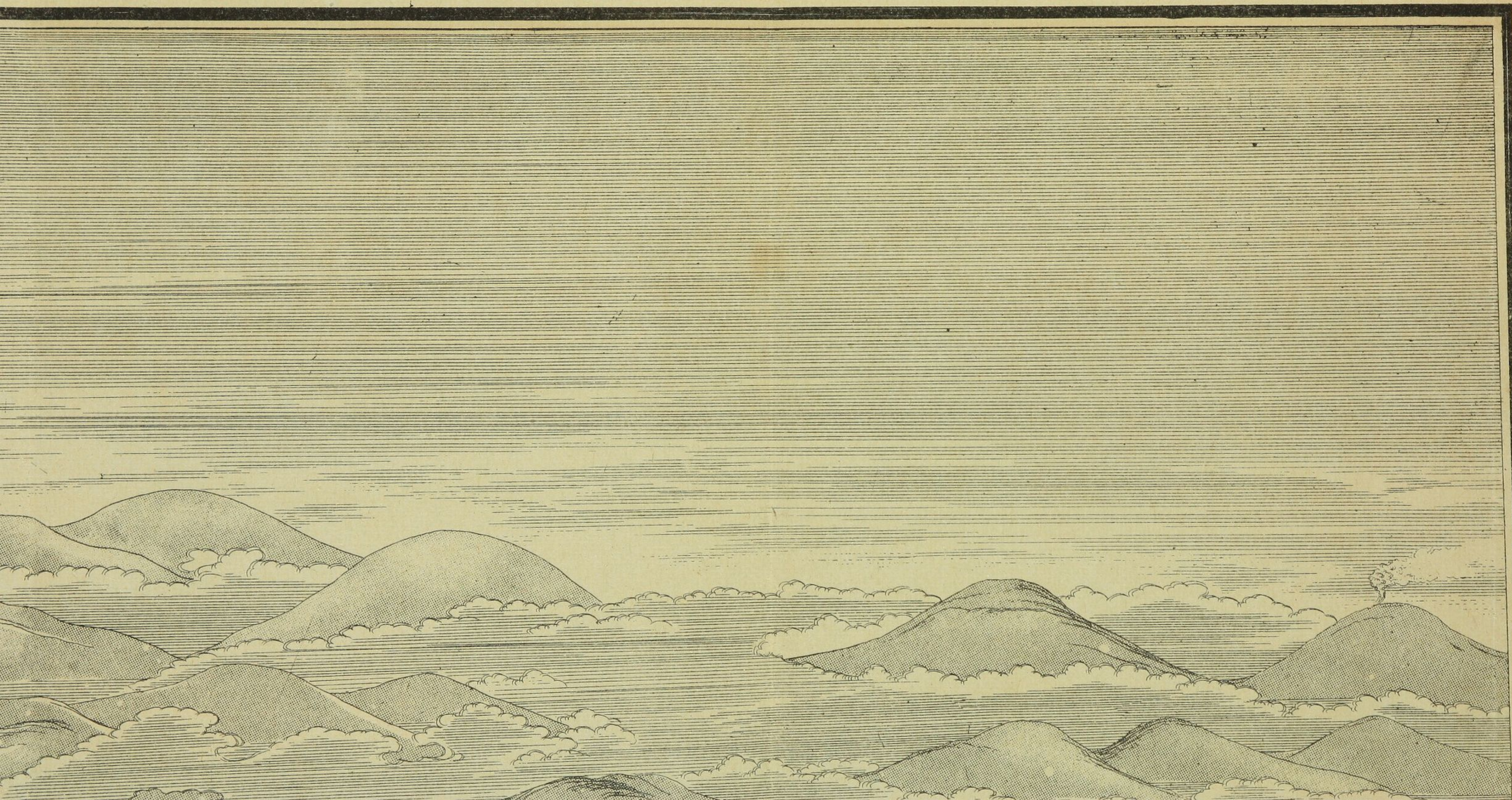


下野國原盛之泉真景

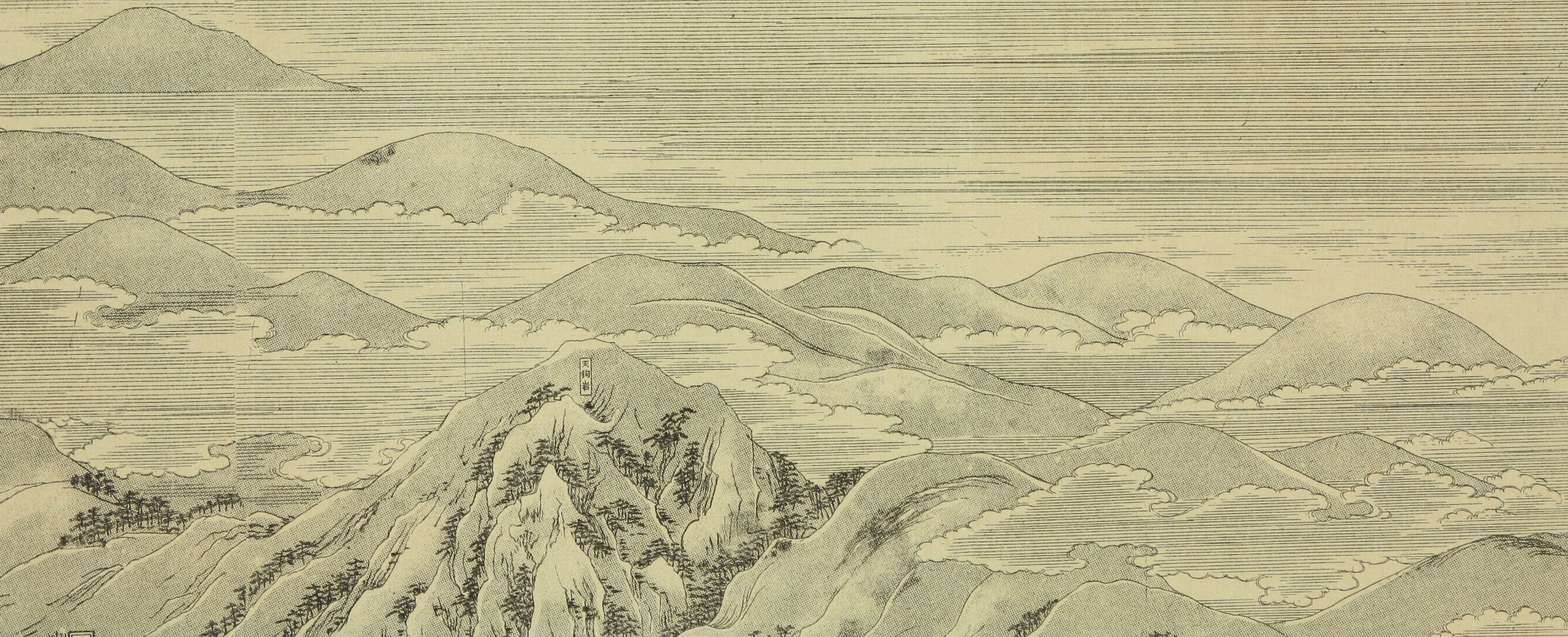


行發社陽光地備全町全市全 即一塔神賀宇地番六十四町野江市宮都守 人刷印原作著 行發日八十二月七年全 刷印日二廿月七年一十四治明

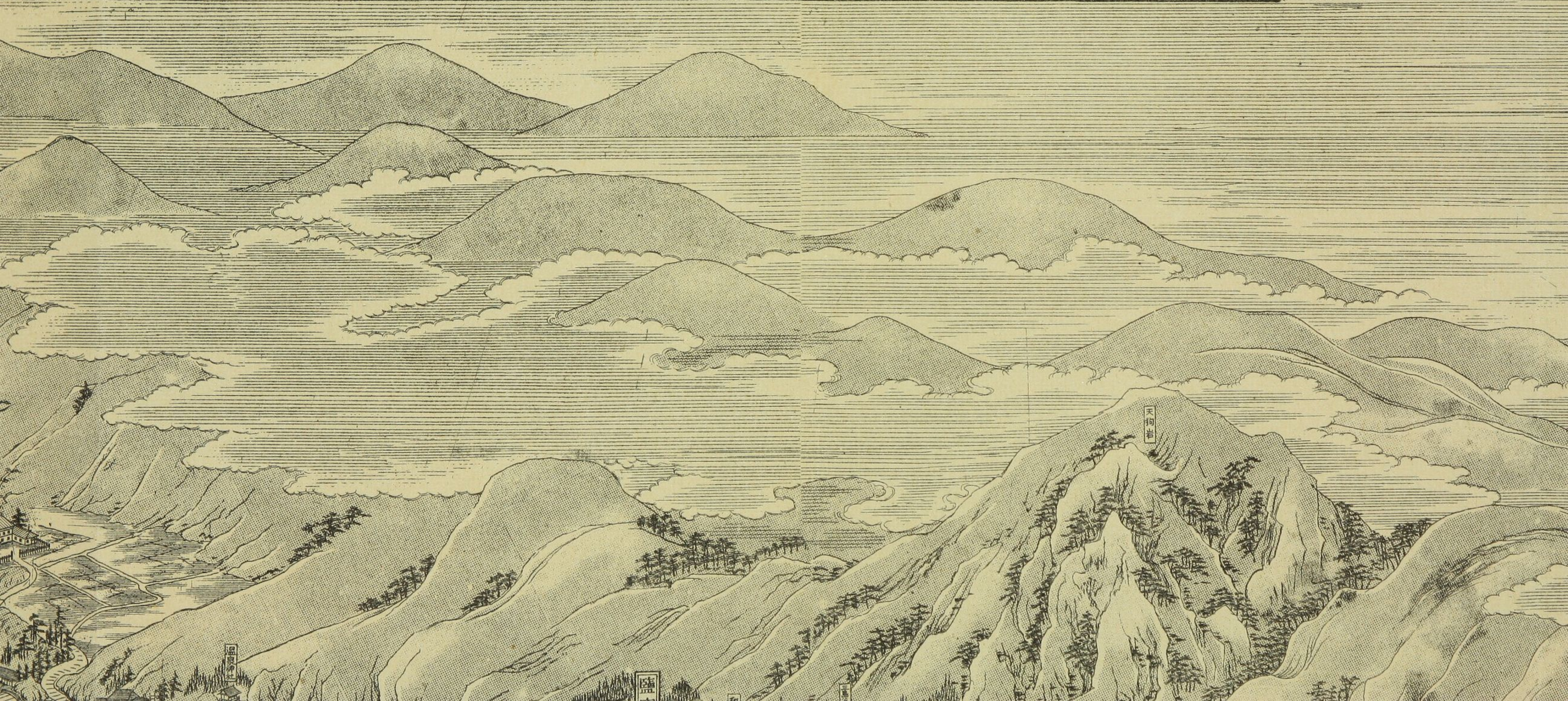




下堅園鹽原盜泉之



下堅國鹽原盜泉之真景



泉之真景





木蓮岩

元湯

八雲

茶屋

源三穴

古町

加治屋

菊屋

佛隆屋

萬屋

米屋

角湯

山本屋

中會堂

錢子屋

中湯

岩松屋

水戸屋

角屋

下物

外田屋

島田屋

池湯

海屋

永米屋

島屋

若荷屋

小丸須屋

清水屋

上倉屋

那須屋

橋屋

八百屋

深澤

中村屋

三浦商店

山口屋

清水屋

省堂屋

菊地屋

福田屋

坂本屋

村役場

宮田屋

松本屋

吉山商店

床屋

河原湯

宮田屋

湯澤上屋

置屋

三浦

鈴木

末

荒湯

手湯

西島屋

中湯

門前



大野屋

三浦

立

松林

五色

松木

和

九

実

皆

紀

新

石

河

天

客

佐

大

龍

後

岩

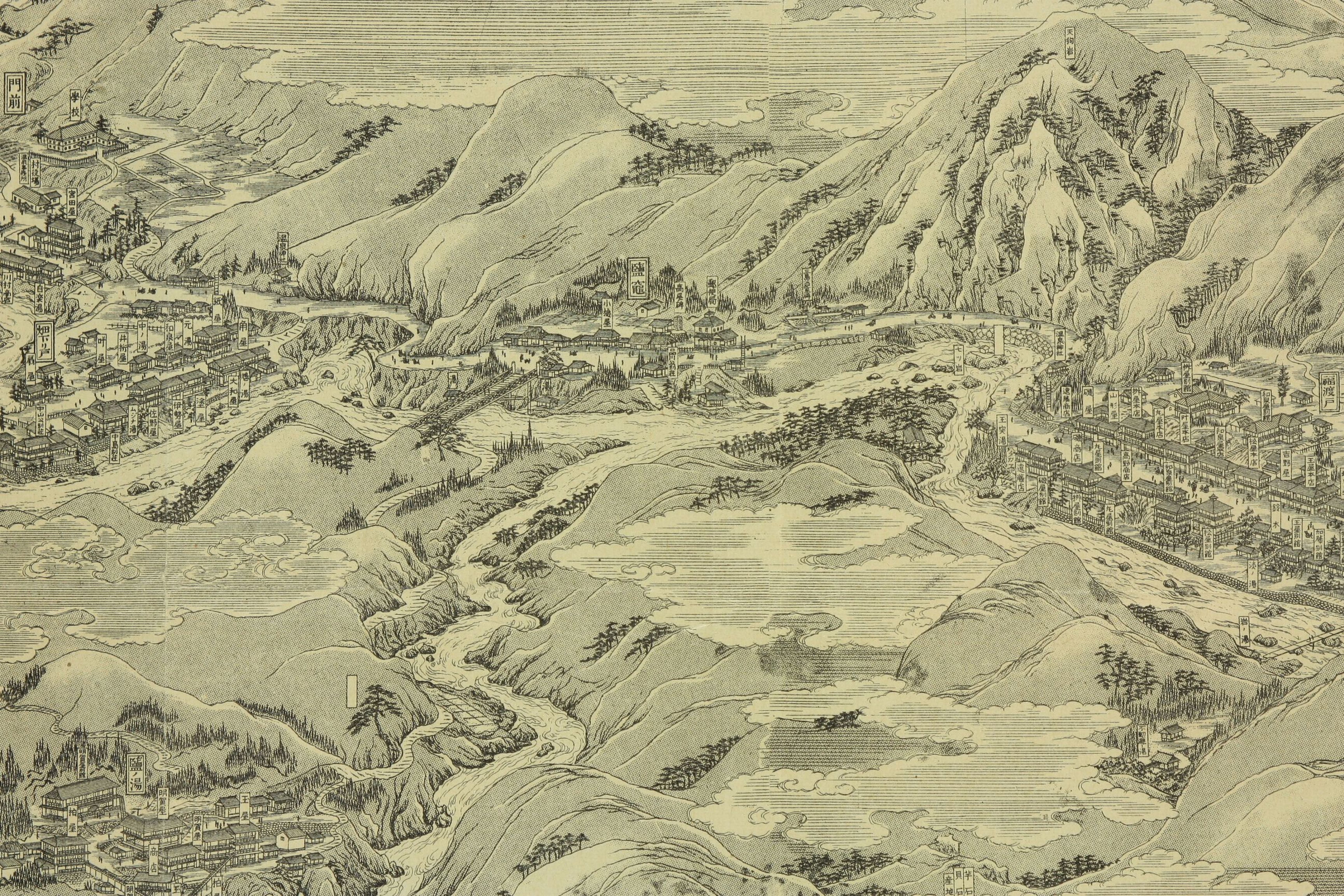
全

全

天

天





天狗岩

門前

鹽竈

福渡戸

鹽ノ湯

羊石
貝地





元湯

元湯

八幡

逆杉

茶屋

源三穴

古町

加治屋

菊屋

常陸屋

風川

門前

荒湯

須巻

畑下

山



五色岩

大木岩

九回瀨

天守閣

橋

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

龍舟

大網

客室

佐藤守

龍屋

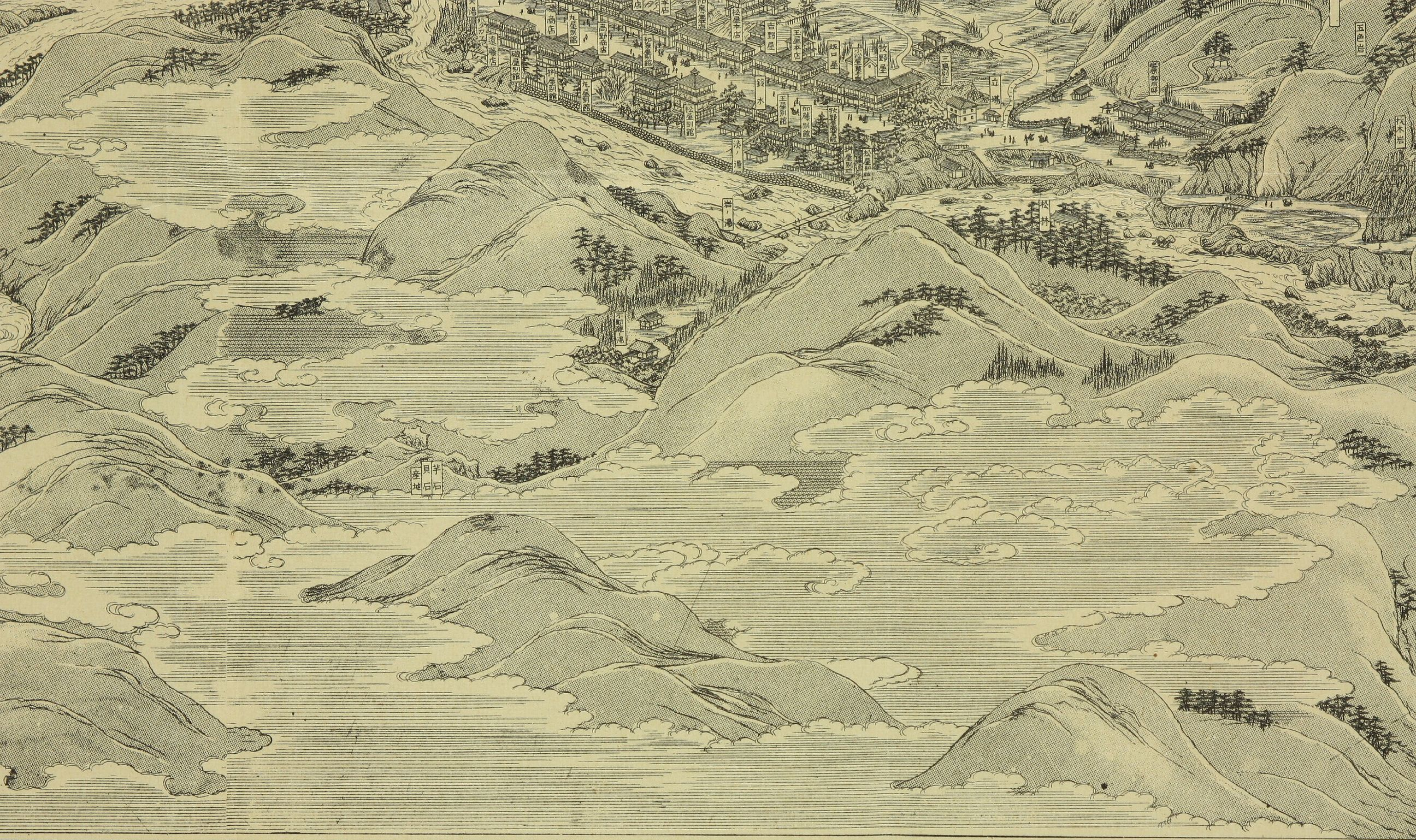
榎岩

関谷

川島屋

天和屋

西那須野停車場



五色岩

楓木岩

高野山

立

三

牧野屋

坂口屋

古野屋

玉屋本店

松本本店

高野本店

九尾別荘

高野本店

大湯

山

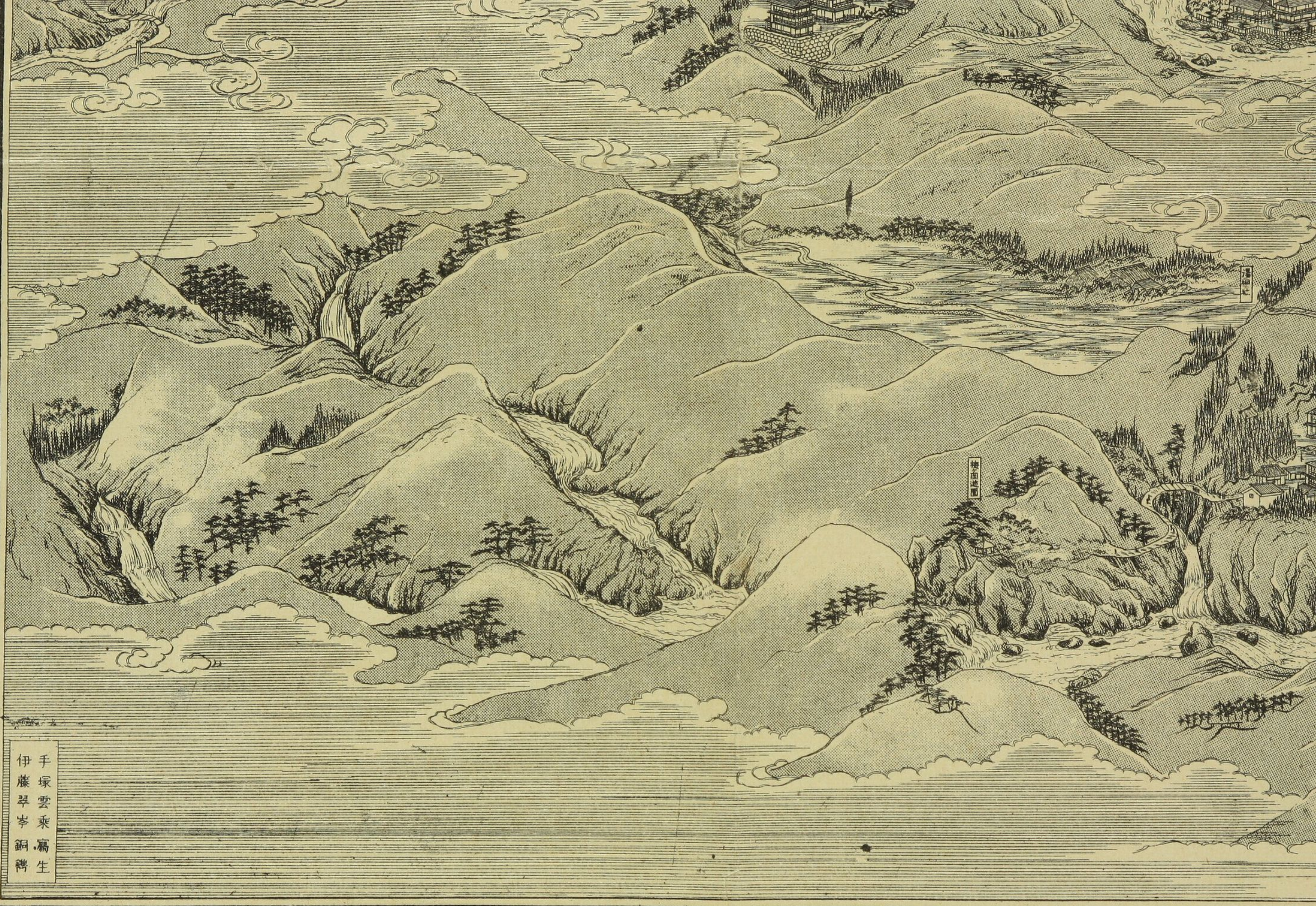
半石
貝石
産地



明治十四年七月廿二



野江市宮都宇 人刷印兼作著 行發日八十二月七年全 刷印日二廿月七年一十四治明



手塚雲乘寫生
伊藤翠岑銅鐫

行發社陽晃地番全町全市全 郎一啓神賀宇地番六十町野江市宮都宇 人刷印兼作著 行發日八十二月七年全 刷印

國書刊行會

國書刊行會

〇百水一言

〇水の大觀在家裡代波為の文に尽く云々

深山之樹、雨露之澤、為滴哉、滴矣、清乎、
液乎、成就蟻徑、導于蚯蚓、匯塊礫、迂徐潤
下、溢于凹而觸于崑角、浸蒼微仰、以會
於巖淵、然而蜚聲泉汨、送聲荒風之颯
颯、東於瀑、以格數百千仞也、雲霧四興、
霧天闌々、靉々如車轉、定若地之震裂于
此、激於潭而壑澗、頹轉翰、巨石砢
砢、砢々、諸溪之奔、駁而配于百川、泄則

澙湖、鑿則溝瀆、渠為是、弗韋弗、旋、
悠々乎、分于涓滄、補、實、瀉、盈、已而、奇、
盟於江河、以揚、素波、壘、狂、瀾、千里、一曲、
滾々、為、函、岸、浣、演、破、破、以、密、起、遂、歷、
潮、混、於、海、矣、嗟、夫、水、之、云、為、雨、之、厥、始、
也、憇、胡、渴、之、不、歎、其、終、也、育、天、下、而、有、
羸、能、至、此、極、焉、者、盡、矣、

○ 水 書

○ 潭々々々、風、際、涯、を、了、了、解、了、了、
淵々々、流、濁、流、共、了、併、了、了、
堂々々、流、了、了、
○ 激、流、矢、如、く、一、程、千、里、石、を、瓦、に、し、出、流、を、動、了、
靴、鞆、澎、湃、觸、了、了、
セ、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、
○ 涓々、珠、中、外、細、流、規、律、了、了、路、傍、を、縱、摸、了、
者、切、者、穉、兒、を、以、て、壁、よ、り、き、歎、

○流ん細く水清く底浅く石見、野花亂れ咲く
の淵を逢ふて瀑溪として流るる者、安女
解ふべき歎

○傾斜ある掛樋に水の走るを見れば水の
急るるを知り

○草尾寂寥々々唯此処を見れば水の
掛樋の舟のふ

○山中寂寥々々を得ず瀑布の落下する溪
流の石に觸る其聲雨のこころ雷のこころ
終日雨の喧嘩と市井の人語りを聞

くと同じ、而して人を神と見れば、
意とをば人間の神経の所次

○天地休息晦冥、雨後益の強雨、
休息到り續東雨

○霞の日の雨、倏忽利り倏忽霽る、其の雨の
利るや雷日鳴り電閃き、天地晦冥、其霽る
や自天日輝き、一空纖雲を止め、如斯き男
子の態なる解ふべき、此の態なるを

○思ふるを時忽るる、陰儀るる、一時を

の皮思ふ一雨来り、之んら解るふのきい人解る貴族社会の継ぐ之れを以て
のそ喻めをき世格を有する人あるに別、貴族社会の
せりある

○細雨霏々降り互りて晴ん多、微塵の和氣
と直電屋の剛際入透入し衣服油度々他百物
を濡はさ、いふにまさる者所謂の梅天の淫霖
婦人の嘔泣を解さぬへき歟

○元溪右の懸り溪流たなち、飛瀑の流り
溪野の溪々相和し、身を洗身せんむらう、
きし驟雨を過り、至りて、目雨勢車軸と震るる

此

うぬし此洲の光景、天地會りたり也、
洲の平の人の光も、滯水の中の人と一般、
一種凄愴の感、撃する、如斯の光景余憶ふ
の身御またて安んず

○水の淵を為す所、高懸の相ある
○おれん石出む、僅うな、剩方とて、今又寒の相ある
○亂石相逼る水と、剛際をもと、まを、の剛矢と石
と別つて、過ぐ人、は、僻るの、は、偏狭の人

○おれ、横の、ある、は、三の、ある、は、曲線の、水ある、は、
枝の水と、雪の、ある、は、ま、は、雪の、ある、は、曲

線の力の争うところ荒りす

○横堅曲女の何んかとも規則三つとも~~極~~概

一と趣味を缺く横力の河石の庭断を得し初め

と趣ある堅力の瀑布も広折あうと初めし趣ある

ある曲線の石も不規則なる所を却つて趣あるは

○由来自然美之不規則なりとす其の本體也日

米人の~~集~~方をも美とするも不規則人~~の~~此理を

推して日本美術を味いば真髓を得るる庶幾

ん

○罪過と~~の~~遠懐の感と起るものあり然と以つ

て解きのめは油~~の~~盡きると~~の~~垂んとして~~の~~大なる

や~~の~~明滅~~の~~の~~の~~時也人と以つて解き~~の~~めは~~の~~大なる

絶息~~の~~と~~の~~不規則~~の~~の~~の~~争ひを~~の~~力~~の~~の時也

○~~の~~石勢の猛と~~の~~岩と~~の~~巨岩と~~の~~流下すること~~の~~殆ど絶

對に~~の~~非~~の~~能ハ~~の~~さ~~の~~あ~~の~~か~~の~~非~~の~~非~~の~~力~~の~~を~~の~~要

ある~~の~~と~~の~~但~~の~~比~~の~~巨~~の~~岩~~の~~を上~~の~~流~~の~~の~~の~~沖~~の~~らし~~の~~と~~の~~さ

あり~~の~~と~~の~~大~~の~~なる~~の~~力~~の~~を~~の~~要~~の~~を~~の~~か~~の~~蓋~~の~~し~~の~~方~~の~~の~~の~~岩~~の~~の~~の~~庭~~の~~断~~の~~と~~の~~也

め~~の~~や~~の~~め~~の~~し~~の~~と~~の~~之~~の~~んと~~の~~相~~の~~懸~~の~~持~~の~~ち~~の~~其~~の~~の~~の~~鉛~~の~~勢~~の~~と~~の~~岩~~の~~の~~の~~庭~~の~~断~~の~~と~~の~~也

一~~の~~林~~の~~蔵~~の~~下~~の~~堀~~の~~の~~の~~池~~の~~つ~~の~~も~~の~~激~~の~~よ~~の~~ん~~の~~は~~の~~池~~の~~つ~~の~~と

堀~~の~~り~~の~~終~~の~~て~~の~~坐~~の~~下~~の~~上~~の~~を~~の~~さ~~の~~る~~の~~凹~~の~~を~~の~~生~~の~~し~~の~~巨~~の~~岩~~の~~を~~の~~と~~の~~て

之れ自ら為らばよしと、而して之れを落し上流
へ一步を進むる也。如くして日々板々月々歳々日
一の事と傳へて、^す進ん久しきを細く若し
き前進を見らるる至る人との舟上へ瀬をも不可
思儀とす。小実も理を於て然らざるを得ず。

○山は川短く而して川は勾配あるを、一雨
大舟を出すに、^し海流下、剩水を留めず如
斯き地方に於ては、^{ふの所とし之んを以つて}農家渴死に困り、又田地を割
りて天舟を貯る、^{ふの所とし之んを以つて}田圃に灌ぐ、^{ふの所とし之んを以つて}こととせむを得
の外術あるを、^{ふの所とし之んを以つて}四國のとき、地方則ち然ら余

先以灌がらぬ、^{ふの所とし之んを以つて}田圃中へ多々の貯水地あるを
見、其の圖形の乏しきを知らると共に、^{ふの所とし之んを以つて}田圃を
割くの不経済なるを慨歎し、^{ふの所とし之んを以つて}其地方の人
を就て問ひ、^{ふの所とし之んを以つて}田圃を割くを不経済を即不
^{農家}経済とせん、^{ふの所とし之んを以つて}其何の土地も不用、^{ふの所とし之んを以つて}割く代り、^{ふの所とし之んを以つて}二
^{農家}百姓耕耘の工夫を用ひ、^{ふの所とし之んを以つて}結果収獲北陸三
より比し二倍し、^{ふの所とし之んを以つて}而して昔の方言を交へ、^{ふの所とし之んを以つて}こ
とを、^{ふの所とし之んを以つて}天の安排と稱する。

○電力燈を点し、^{ふの所とし之んを以つて}聲を通するを、^{ふの所とし之んを以つて}所謂ハイクラス式の
設備也。而して山間の都會に比し、^{ふの所とし之んを以つて}此の設備あり、^{ふの所とし之んを以つて}較

々々すんは一尋都会地先地すの概あふとて
富あり故也都府の現重と電燈電話の情あり
七電力が源の状をたしり却て山間の村觀物
量之れを知り又其の附近は方力が源所あるが
故也

○京都は水の名所也其の清冽な於て其の味は
於て天下の冠なりと云ん京都は遊ぶ毎に平生口
にさす之れと云ふ一晩間もさす節を曳し橋
下の涼さを聞ふ

○水も異なりて形と異なりたり其の流れる
さうもあふり然るも水とぬきり早きと鈍り水
のい頑固なるものありけり

○水も流れるし唯に燈影の落射を得て
流氣あり

○水の粉末をい美なるものとありて霧
さまを見んは晶盤をいうごとくあり乱れを
懸持つて騰上する飛沫を見んは薄紗を
振あらしめし
月夜に水蒸気が日光を射すればこゝろ
を生ずる

○水の味最も美
夏の間
山路を攀

ち登り流汗背に満ち氣息奄々たるの時泉山麓の
清流を掬い喉をうるうるの時は又那の漢の
人廻歌うて回く平生於物因無取消交山中於一杯
こん地り川の消息をそよよ然るも輿加馬道を
行くこの此味を解せんや
○亦あとうまきとものをあし　信終の人多く末後の
亦とのむ

○此と革新の好標本とて又革新も一井動け
ば此と動のそんは腐る井此のこころは此と
と甚しけんは益々自らを得亦と革新を報
教ゆる好師範也

○俗言に三小婦人と亦性うると是れ陰陽家の
言わぬ所の様々の所ありとて此の世も近世
生理上の研究より依るは此言確なり偶々書きた
と物なす、婦人と男子に比し器とよく多くの水
合を要す、婦人の多く東蒲茶、牡丹、麻子、芋の
此き凝粉性の食物を嗜らるる其の體質亦分
まきよく依る也

○山と亦の配を得て如く此の風景をみる時
此山も亦を瀬けはるる味也

○山乃と女互ひて相扶けし風致を作るに互ひて又
ハ朋友也山女は成多くおあつて互ひて相抱付しを離
んさる互ひて見んれ見お
又夫婦と見ると得ん山ありおを刺きおあ
り山を越し独身さう言ふ母婦の配を得さ
互ひて見んれ
○外物を保つて越を深み溪流に橋の架さる
亭榭のありて紅燈のあり映さる流螢の方面を元
ふか艇のありて泛ぶ漁夫の網を魏する兒童の論を垂
るお高の横川を棹めて飛ぶ比喩ふおの趣を大ふ
らしむ

○雨後風起の日は大お来るとさお余初め女の故を
解て了後漸やう女の解を得とる美し山あり
の樹木其お或十萬女の樹木の葉或千萬雨
の葉を濡らし其の葉上を停り留する水量
一葉に就りて見んは僅うに数滴に思ひきさ
然るも或千萬葉の上を停り留する水量を
合するは或十百萬の解の大を為す而して日
光之を乾かすは違ふも強風一揮してんは
此の或千萬葉の解のありて流る流る地上

流る或る部令を地下に入り或る部令を流
れを終る河を投ず、雨後の爪出舟の因を为す
と云ふ故也

○我邦人の扱目日々浴し厠へ上る毎々也
を濯ぐ、各固也是れ日本特種の慣習也
に美ざる慣習也。人或る世界各固の人皆
然りと思惟す、**え固也**非也。然れども
實然りて、其の習慣の同し、**え固也**種々
有る原因あり、我邦到る潔淨めを得るに
有る固也と云ふこと、**え固也**と云ふと深

く水に富むの國より生れざるを視せざる可也
○物の相異なる火を造る可也、**え固也**
を滅するを^何火の^何燃る^何能する^何勢
力に於て又分量^何に於て^何代り^何也
用を為し得るとも、**え固也**火の^何代り^何を得る
に於て也、**え固也**見よ、石炭を用ひたる工業を今も
電氣を用ひたる^何も、**え固也**や、**え固也**
あつても^何も、**え固也**無^何て、**え固也**無限の火
を作るとも、**え固也**を得、**え固也**火を滅する力あつても、**え固也**
火を作るとも、**え固也**の勢力無限

○其の真味を解すといふ曰く茶人曰く醸造家
 曰く染織家或る文人と其の亦あるといふは硯工
 注し或る刻字家と其の亦あるといふは材料
 養のいふは魚類の亦あるといふは材料とすべからず
 此の亦ある重きを措くといふ而して此の家業製
 師此の亦あるの亦あるといふは不純潔とすし特
 り蒸溜せしめたる使用せざり

○野味と希少のものは種も概してうすし塩の如
 き精製せしめたるものより多ののニかりあるもの却つ
 て味もよく亦も枯も蒸溜せしめたるもの味もよく山の
 亦も味よく要作の野味も亦よく
 ○同じく此の亦も皮膚膏の亦よく芳するは汗と汗の陰
 部とともなるは之を味とすの津東は津と汗
 然らば汗を汗に解さるは亦よく亦よく亦よく
 此何れを解し喻の野卑とす

○川柳子曰く大井川とす品川といつたは、此地
 理の亦あるの知くす道理なり
 ○影の亦も映く趣味あるもの曰く帆影曰く橋
 影曰く山影曰く塔影曰く花影曰く月影曰く
 体影曰く雪影曰く梅影曰く雪影

○鼓甲のあをこぼるるは味あるもの曰く櫓終る
曰く鐘終る曰く伝終る曰く款乃曰く笛終る曰く
吟終る曰く齋終る曰く持衣

○古池古井も閑寂の趣あるは此流西洋人解せり
支那人も解せり閑寂とがじと云ふ支那人無き
流るる

○夜光を浮べりたるを艶々たる事あり
○相思の文あり
○支那のあゝこゝろを感ずるは
○支那のあゝこゝろを感ずるは

○其の流るるを暇する奥床に涼くして地を
影のふ瀬に影を映して奥の
○岸上流あり舟車を廻轉し剩る茶舎の厨へ入る

湯槽に入り盥ぐ器は湯溢ん盡る目変換瞬時も
思ひこころは溪村に於ていとこの景都下の
富人は建ちたてた村邊の舟を常りに美し

と得たりと云ふ
○其候銀橋を架し之れは白砂橋を成るついで雪の
擬す然るも利便自尤の雪の美るるを如くす

洲を銀線を庭中の岩を築きし流を
洲を銀線を庭中の岩を築きし流を

終るる自らの激の美なるん如しなり

○毎年解日島の客其数萬を以つて數の海へ行き

河に往き又山に往く其費了所或十萬金而して

其目的之一掬の涼味を買ひんとするに在り涼味

ハ舟に在り渠等ハ往くは舟を買ひて行く也

○(鄂州塩平沛左中執事)

○凶嫌の野屋の場に一泊を爲す

右答濕乾丸留舟白沙此角一統亦入雲

湯地皆さへ方

善白の元某言しと則をさる

○板橋の味よし雪を市んは味ありぬん味

味よし露を市んは味あり草舎の味よし

雪を市んは味あり

○海へ趣を添ふもの曰く嶋嶼曰く亂進曰く城曰

く燈臺曰く棧橋

○舟着るは舟の因りる者も以つて名を余するもの

○千石を以つて船の曰く春の曰く柳の曰く東江の曰く

佩川の曰く梁川の曰く藍川の曰く秋の曰く菱湖の曰く

湖の曰く東湖の曰く北海の曰く盤の曰く盤行の曰く

曰く柳の曰く南海の曰く東洋の曰く南洋の曰く南洲

回く言方曰瀾水 回く赤水曰鯉水 回く西花唐

曰く南冥曰く蒼水曰くぬ水曰く海屋曰く時を日

く相江曰く松嶽曰く春濤曰く雲水曰く雲峯

曰く雲峯^雨曰く雨谷曰く雨山曰く梅潭曰く燕

竹曰く雪山曰く畫堂曰く龍潭曰く雪舟曰く

雪村曰く海客曰く湖村曰く雲濤^一曰く列天

又水^一曰く

○旋渦のホキ^一の美觀其の木^一の壯觀

○旋渦と舟の曲線の最も美なるこの女のホキ^一の

と池中の松とも之んを見つ小旋渦と云ふ^一

女大なるこの^一崎^一を^一海^一中^一に^一於^一て

えり大旋渦を壯觀^一し而して觀る梅嶽の如

風又鼓^一と

○山大の氷塊^一水^一に^一浮^一白熊^一如^一別^一と^一没

一是ん北邊^一忘^一源^一の境^一に^一於^一て^一觀^一るの

景^一は^一遠^一く^一崇^一の^一感^一を^一鼓^一す^一に^一若^一く^一と^一是

○昔し浦嶋龍宮^一に^一遊^一び^一金^一殿^一朱^一樓^一百^一珠^一千^一寶^一を^一觀

見^一し^一と^一是^一ん^一と^一假^一托^一信^一す^一と^一是^一ん^一と^一會^一す^一

潜^一舟^一夫^一海^一底^一に^一木^一を^一立^一て^一龍^一宮^一百^一珠^一千^一寶^一を^一

觀^一る^一而^一して^一得^一く^一龍^一宮^一と^一知^一ぶ^一唯^一此^一の^一龍^一宮^一と^一

龍宮^一と^一

明

一考しと同一なるなり

鐵船也軍艦（海軍）の若しと龍宮を渡りてくるの

なりし之を木蘭果の上下成き（果）能くするなり

く之んを引き揚ぐ（引）若の古事（事）為るなり

此の龍宮を軍艦（艦）即是なり

塵埃を掃く（掃）適所を舟上故に能代の漆工

と海上に出（出）漆を塗る（塗）此能代漆の漆工の

見鏡（鏡）の（能）海産を留めたる所以

〇吾の方迄の涼棚を言す而して尤も鴨舟の涼棚を

言す鴨舟（舟）と云ふは古例舟上（舟上）の棚を言ふ一橋

棚（棚）と云ふは舟中涼棚を言ふ大抵一橋敷く

と云ふ棚上（棚上）は火走舟入映しと趣あり（趣）舟を

と云ふ茶室杯盤吐き出す舟下の下流に舟

ありし杯を洗ひ（洗）舟を濯み（濯）而して橋下別々

涼棚を架す元洲劇場の棧（棧）と云ふ

其甚繁の目の如き又劇女と一巡約四人を定む

而して（橋の道）舟の仰げは橋上（橋上）の役者

轉動を聞き俯しと云ふ涼々なる舟下を聞き

橋の晴涼と云ふ也他は例を記すなり

一記也

〇我邦の名漢名方漢居氏の探検は依（依）世々あり

〇我邦の名漢名方漢居氏の探検は依（依）世々あり

〇我邦の名漢名方漢居氏の探検は依（依）世々あり

〇我邦の名漢名方漢居氏の探検は依（依）世々あり

ハコトも~~あり~~ 随つて佛典の讀を~~も~~と~~る~~こ~~の~~
のう~~ら~~又概~~は~~水~~を~~遠く佛~~の~~像~~を~~回~~り~~て~~は~~遊~~の~~遊~~の~~寂~~の~~
味~~と~~境~~と~~と~~も~~潤~~れ~~し~~高~~崇~~の~~味~~を~~飲~~も~~一~~層~~深~~く~~
ら~~う~~

○~~葉~~萩浦~~を~~連~~る~~白~~鷺~~ 水~~を~~掬~~め~~て~~は~~

が~~先~~然~~る~~雪~~片~~の舞~~の~~ゆ~~め~~し~~又~~是~~ん~~水~~を~~遠~~く~~の~~景~~

自~~ら~~と~~畫~~ぬ~~る~~も

○~~大~~湖海~~の~~こ~~と~~と~~極~~目~~際~~を~~一~~偶~~々~~朗~~月~~天~~の~~中

ま~~ん~~ば~~上~~下~~澄~~澈~~天~~水~~の~~相~~接~~して~~は~~星~~の~~界~~を~~

見~~る~~も

○~~舟~~の~~橋~~の~~水~~の~~流~~し~~て~~松~~の~~櫓~~の~~の~~吟~~を~~聴~~く
の~~言~~の~~可~~ら~~さ~~る~~の~~の~~情~~趣~~も~~

○~~舟~~を~~泳~~ぐ~~者~~も~~水~~の~~温~~が~~日~~も~~知~~ら~~ず~~其~~の~~速~~力~~

を~~知~~り~~又~~其~~の~~味~~を~~知~~ら~~ず~~染~~茅~~の~~回~~る~~都~~会~~の~~河~~水~~も~~

む~~も~~不~~愉~~快~~を~~受~~け~~ぬ~~舟~~微~~温~~く~~と~~往~~る~~石~~油~~の~~氣~~

を~~帯~~お~~し~~

○~~舟~~を~~到~~る~~處~~得~~る~~く~~ま~~る~~者~~も~~舟~~も~~自~~水~~の~~味

も~~得~~難~~し~~年~~々~~幾~~千~~萬~~斛~~の~~酒~~を~~飲~~ま~~る~~

灘~~に~~於~~て~~自~~水~~を~~僅~~く~~も~~一~~井~~も~~こ~~ま~~き~~る~~も~~

○~~阪~~道~~を~~穿~~つ~~て~~水~~を~~通~~す~~所~~鐵~~の~~鑿~~道~~に~~比~~

せんば愛うん趣きし余當る琵琶疏水の邊道
 を通過す一船約十二三人を容る船上至甚あり船首の燈火
 を點下墜道の幅二船をさうぶを得し後
 往船後船時々相會し互ひに呼聲初め開門を
 入る陰々咫尺を離せり漸やううと目暗く横
 几淨視するに船を一側面を傍らに往く側面
 の鐵釘を特異な船手之れを獲りや
 前日に入ると一船一側面を流る行く也
 於光の暗流を照らし船下舟影を聴くのみ
 情は懐か神憐れ氣沈み船客皆黙り忽ち

前日、日燈火を認め頃刻に船影のき船と
 相會しとさし船手互ひに呼聲し船客垂不
 答期せりと萬歳を叫ぶ亦一種の光景也
 〇釣客船に起臥し往々數日に流る 後つて曰く
 漁舟に身を寄せ舟上は寝臥して天中を舟を鳴らすとの
 らしんは真個舟の上は味の解せり
 月おのそ月おの致ある時夜をり時夜をの致あ
 了字面幽寂の味初め此川に味の得
 へしと又曰く睡中物言ふ對きえらめは大意
 船側入躍り聲を承けしして船入薄中る月走舟を

昔ありの魚頭を照らし魚眼の閃々共ニと一種怪物

引くういふ感と起情のめ掃懐くを

と黒おなごしるを又曰く河中の杭杭の

火の燭上立上りを思ふも夜半舟中の身せ

空ろろの人し初めし見しを得ししるるさ

る可いうと念ふ

○野お清洲農夫蔬菜を買い来つて

晩の木物と俵十段の香味の味とを

○魚眼蟹眼ハ魚の淋騰の状松籟濤聲と魚の

淋騰の状

日商人澤布酒客李白と清の偶れとりる澤

之酒を飲めは酔を或く余常の酒を推す

○平生の言々二信三信をいいし余常の

し澤を酒と推す飲む我の飲む飲む飲む

け終す古醉をさくす漸く澤布をさくす肉全に就

くこいい氣温暖をさくす忽ち醉をさし

さえと倒れんといふ利の義し澤布をさくす

用以て舟の前を行く以て澤布の人を

酒を備へる杭の上を又澤を

み多く紙を遣ふ地を易かきう危険をえん

○河水漢衣推を有き者一うて送らる而して先と

尤も刀水の備在月をも喜ば称す

○汪々たる緑池ハ水の因んたる態五つん好まら

○毒暑人をも萎じ骨灰とんと欲す此時の方

リ強雨一過す莫以萬金の値あり

○都下山間溪流の趣を有する所唯此茶溪

ありと腕車一道をこくこと其の味をいふ

清舟と棹一をいへ

○金尾種次即書林文淵米内赤洲南の如木状を為と

一奉ふ、延へてる、多き尾山氏韓圃を至る曰西宮

内府を就き、海印寺不花亭院花径の殿を

借り、荒干の創本を作らんことを願ふ、略々許

可を得たり、但此一個人の願を許し許可するを

而もいふ、念今但儀にて願出べしとの由を

ちと信つて、其院を花形り回ぬ念を懐儀し

お花のより名を結成入る首を、とんを次つて

出る千の元、今も結成四名を結成あなを

えらる、折角内あつて、信也七女は今も

名を多し其の計畫を支く、其尾の終るべき
んは危殆の極も也とて、韓圃の於て四書と云
すの内識を以て、荒し時接するを、利尾刷り
と為すこと能はば、今を以てまこととて、ぬれ
物と此の如く許さん也と又云く全部刷り
しとて、販賣に々し、中々孰と其の受け
のよきものを選び、特にお少部数を以て刷
行らん、曰く板の存するに、十五万部千枚と
也、年太院君何、よお此板の或る部分と
刷り、其書、納めたる、この如くと云ふ、一二冊
と傳り来り示す、その如くも原板と辨り、
おお、(うま)も刷り、おあも、其れ、其れ、
金尾余、聞あ、花板の、何と刷り、
お人の、歡迎と云ふ、今、何と、随函録
を、お七、所のもの、之れを、刷り、
又、大、を、唯、此、
や、再、韓圃、起、は、つ、之、
左、を、換、と、二、三、の、
意、を、其、の、尾、の、と、

(八月十四日記)

○寛政版論後の存在を以命稿の田吉房より伝へ
 世にありしは、~~寛政~~此の論後と朱子集注とを以
 朱子の死を寛政と記すこと僅かに七十一年
 此吉の稿を以てし、~~田吉~~田吉開板せしむるに
 するに是より約二十二年の間に於て原本の
 左を誤りて川紙の長井甚兵衛花房とす
 或は人物は江井の書家と記すは其吉を按る
 藤原とすは、或は終の人の人を欺く端年と
 する七の如く一とすに依りて微くこととす
 ○尤甚他稿と題す。享保十冊版に七とすを

田吉と察するありし此吉と日本書林の宋版版を
 勿論の如く此版類とすは流しにせしむる事
 又此版式にも鄭堂と字しあるは田中前宮お
 其の一家目のいふと人として字を以てし
 とすは田吉と察する者も其の版式のこととす
 大抵此版にありし宋版の部のみを以て三冊
 ●又うとう余未だ是より免る月を以てす
 といふことありし他は、~~田吉~~田吉の
 書館に字了序ありとすは、~~田吉~~田吉の
 の版を以てすは、~~田吉~~田吉の

○また亦に方々方於芝那ハ文庫一と得るは、
色々の革、
り多しは、
おくし、
其の名あらしし一の特徴を地の里もる
この破格七より文章の慧路と一し其の

寸

こらち、
い、
菊尾のりし一のよをあしらむ也

○此ころ早稲向の正、
ちん、
まゑつ、
思ひ、
早く、
りおち

作つとさう漢字解をておのり一版のなかへいこま
 うつと初め思ひんん何と漢解とをいこまのつう
 羅山の注のちんうまうてくさうも朝解とく
 またのいあらうて漢解とをいこまをく朝解の
 以後の解したてて此名うあらういあらうそんを
 其後羅山をいあらうて一月とてあかゆる
 代と初ていこもて五山の語をいこまうて大
 部のものを漢解とをいこまて史記あかの東坡集
 といこまて其のていこまていこまて保しぬてい
 のまにいこまていこまていこまていこまていこま
 ちんていこまていこまていこまていこまていこま
 うていこまていこまていこまていこまていこま
 俣とてい



(あかていこまていこまていこまていこまていこま)
 まていこまていこまていこまていこまていこま
 印をいこまていこまていこまていこまていこま
 して而していこまていこまていこまていこま
 の初る處を漢字の
 心も封字をいこまていこまていこまていこま
 休未いこまていこまていこまていこまていこま
 新息也

○高橋義夫(種名)卿之の文人を本邦に安んずる
り印人の間を往来し又金づかひを来りてを以て印
語を換りて頃名達しよと云ふもちと云ふ也し
山業二三と云ふる其の定く見古の洛陽のあり
ふ初めしものちかそと云ふは洛陽也又之を後士
の選ふるに西陽士と云ふもこゝろも也桂木
車ある事を得る事ありて寄示の也凡そ
まゝと云ふ

西陽八月十九日誌



第六河曰洪宕古考全陳趙之妙
如以觀神為所向之奇



〇蘇氏印略 刊版のりま四行各一葉半迄のりあが
 余を後のお紙ちうと其際心りきたと一ひりけり
 りこと終極やうも記し幸一う余を末を出来
 叶る配本し来りも紙質肉も印のおし方
 大何よりせり分り一紙々ああのかうも
 紙一枚と挿文印もの五匹ふうつとる抄紙を
 といふよし一紙は遺紙とさあしとああ
 いろいふ一紙りもあを明ひたつこ
 四冊一帳を厚さ一寸七の分よ紙二四葉の
 序と終しりこの河本本と異るるるるるる

河本本四冊入り一十五冊あり受る終をうする
 印を改刷り全印終極の状況と云ふ
 の前七七八年間余るあ紙味を付成し古え者の
 言古利本の様本と云ふるは海月也りの紙片
 ああ一紙一きああの国我部上代のきえ
 紙本降つてもああもまを紙片も終極の
 紙ああの一紙つて得るは紙つてあし終る大
 張の紙を心りてあし一紙つてああ廿二冊
 をああもああもああもああもああも
 してああもああもああもああもああも
 してああもああもああもああもああも

けり披あるあはれとてかゝるものいふまじしこゝ
偶々曝きうけし目録とせしこととていふ
毎の七半つに目録を半と譯しし終る四〇を
考へて成る多きは一廿二十のりさるるに
十も二十半つに約千紙をぬき題して温
ぬ紙帳とて此紙ぬらふ年八九分あり余りあり
の意集なることと書し中々四五半松木様
七の尾代に照る日の意集と本とて意集
なるものあり此の意集なるもの本とて意集
輪地のものあり又納しける古本又甚にありし

又傳へぬ其書そののあつたるもの一廿二
最初より東大寺古文書集に名する既ゆん
といふと多くはるまじきものあり一約るに
丹波のいふところを架すといふは自れ
漢の地の軒視とていふものあり
依りて川流つて甚道流干の甚とていふこと
又改しき古版切れを集めたるもの尚古
紙と題して別の架すものあり一約るに
新の意集は松林の意集のいふものあり
推をぬきこと千一とて又古たつ資

料とあるは送りとあり(の巻四十二年八月廿二

日記)

○家祖徳海為雅印七八を有する為る目録系
石印一と多くは概大なる一二五冊の最款
あり他皆るを款偶しあり文集を後二
冊冊巻五百五下刻不記方言」と送する文中
「余印京師人芙蓉者之刀過す」とあるを思ひ
毎款印中芙蓉の印のありしをあるべき
を認めし。但に未に出し捨てるる暇をあるに
他日敬所の鑑を預めし判別せんことを祈

すといふ

○石の記を思ひし。其の結海海印を鑑し
捨てる芙蓉の刻とありし。あるありし
あり印を鑑してヤ井印を鑑し芙蓉の
為なるものなり。初めは快くしを鑑して
会を修する。然れども方しを鑑して四股骨
とあるも舞ありあり也。印を物し余の鑑
定のこと。一類芙蓉あり。市鑑を鑑し
外の鑑を鑑し。芙蓉の刻あり。芙蓉の
一とありし芙蓉の刻あり。芙蓉の

漢の居山と云ふは古方孔大印、初代花六と云ふは
 と物言し、危者印の一雨ふ刻と云ふは、果て文の二と云ふ
 古印勅命と云ふは、時代も印人年譜、果て
 志らくは、芙蓉と云ふは、遠くさんば、元と云ふ
 のたふ印影をぬめ各下と云ふは、

古芙蓉の家 古而印



委田其勅命



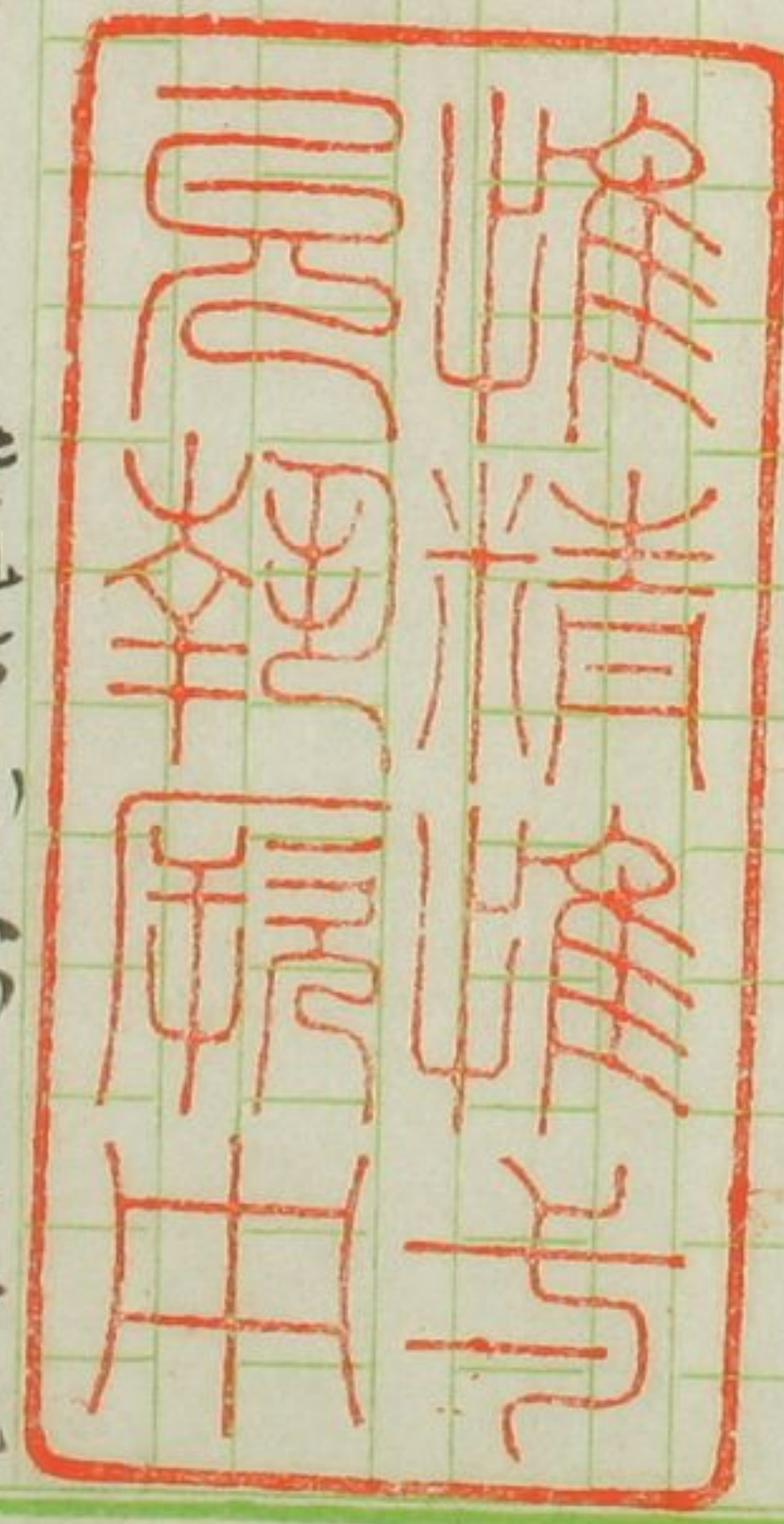
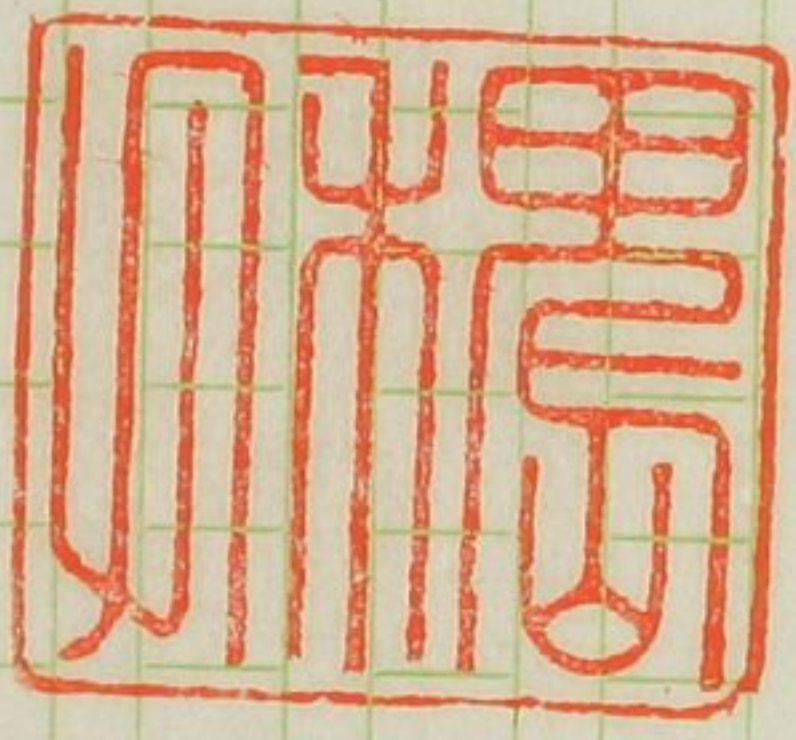
古而印

屋山歎



初代花六 渡打茂香

口上



古而印

北冠信花六印く家親
 の作るありと云ふは、元と云ふは、

古而印

紙の印をなすてしるの儀に、二七款、其の者、刻
 口と唯比し、色と、が思ひの、ち、好、あ、し、この
 教、使、し、て、此、の、事、を、伝、は、す、と、是、れ、也、惜、し、む、し
 〇十井、敬、不、お、金、う、架、中、の、秋、念、印、刺、と、字、を、余
 の、定、本、を、又、以、て、を、書、し、た、り、の、よ、も、を、初、め、と、す、と、余、是
 高、師、の、架、中、の、物、し、は、る、こ、と、を、報、し、何、人、の、花
 一、と、人、あ、ら、む、と、し、川、お、お、お、く、人、も、一、と、師、他、
 一、と、於、未、集、一、と、女、の、名、を、と、ん、だ、う
 の、互、人、賀、の、夢、に、お、中、世、を、書、の、通、文、の、印、を、危、し、む
 こと、前、の、う、二、三、つ、り、を、其、印、記、を、書、後、に、左、に、取、ら



漢
 雲
 亭

百水一言(續)

○大雨決句三日雨の繩索のこと細く細く蕨糸
 に似て巨細交り降りて洪水大り至る江溢ん
 河決し満舟奔浪蕩々舟を漕ぎ見たり旅是業
 舟人を載せし浮ぶよ水の災澤凶阜溢の
 地湧として海のことと水流水字を見たり満舟楫楫
 舟を呼ばん是れ夏時結々見たり災往々茅屋
 人と載せし浮ぶ高きあり舟の心心同言よ舟舟の
 相也舟様ありと虽も濟ふ由舟是れ水
 の災害より酸舟也未だ抵ちぬ夏時舟起る

夏時水を欲すと云ふ如斯き水洪と云ふ人生
の目也

○兼成辰の役余未だ少年一亂を信水に沿ふの
某村へ廻り此地堤防屋より高く民家常に
屋柱に繫ぎ不虞を備ふ一木僅に夕夜
致言水到ると狂呼す致馬を起き戸を排し
出れば大と既へ椽下り達す方聲身・・着
く屋の上へ上りんと家人屋柱より舟を卸
し倉皇之れに乗る時心々舟午前二時細
雨霏・湖黒中遠咫尺を辨せし船中皆生

逆る舟の行く所を知らず天明初めを雨圓
と云んば一村既へ舟下り没し僅に屋端を見
つゝ昨の見る所の水田も今と大海と變し
舟を大樹の梢に上り繫ぎも忍びしん
一物の上りと墜ち来りし時遠視するは蛇
也仰て杖上を視す杖上の小蛇繫ぎを杖
枝上へ舟を托すも視す一吐懐然なる也
○近年又信水溢る余偶り帰省し郷里に在
る一日縣官と共に舟を載し浸水地を
視察す淺一部全く水底に在り丘陵の外

と樹木の外眼入る者あり而して舟の最七深き
所を水田と為す舟行半の備さに捲状を見る
帰途激湍に觸れ舟覆えんとす一行惶
然色を失す余曰く死に即ち一死然れども田
圃の上は溺死すべからずを折るる(吾ん忍び
おと一吐共然) 録るる吾氣地をさるる似る

○街車板面一色街上燈光満地をん此光景を愛
す

○元の流原を棄てん水と濁り出る也海を空
水と波と鳴水と泡と漲瀾也海嘯と陸波

也瀾と波と也井と谷也流動すも然と字
池といけり也海といける所と山分るる川と流
掃即ち掃くを掃ふと来る歎

○文章の分多きと山分の多きとのちと
東坡の文章分多し故に波濤動盪韓退之
の文山分多し故に峰峦峭起

○杭州と西湖の水墨を磨くも無比の匠
と云ふ文祿の役皇公若干の舟を運輸し之んを
京の某川に浮く爾来其の舟文人墨客の珍重を
らんぬまの人或は百里人を舟にして走を獲る

見之んを獲るにのちあるは濠岐の漆谷茶市
と書し得て不を人と特流し送らる此の舟を
汲りしむ使者京師に到るや舟に也村の沽
酒を汲之キルを漆谷に會ふを漆谷一揆互
らに運りて申すは漆谷の辨しむるに云
ふ是れ漆人の汲る所又次つて一揆物とめたる
をいふ

○寛政四年大村候長崎とて西湖のものを取ら
しむ皆河漢国女の餘瀝を尋しむるに其
し即ち墨を和して西湖の墨と云ふし自ら

女の手由を越すは西湖の墨と云ふなり
句の餘瀝とて之んと田山を尋るは漆の
るんと云ふに又一帖を和する今其の墨を
其の墨を和するは在舟の墨を和する重んじて
るゝに以て思ふなり

○賑市十連街衢縦横の溝渠流塵花元寒
しと掃ふ由あり偶々驟雨一過停留の汚
物を一掃して溝渠を清く其の塵を見り
ん夏時の一快也

○一紙動くや午風死す海は此時黒甜仰る

をり

僮

○夏時^邊僮を役しと方と庭^園申^園の灌うし木

石^邊淋^邊漓^邊津^邊意^邊漸^邊涼^邊味^邊をえふ

倭^邊或^邊搗^邊を回^邊く卿^邊等^邊日^邊輪^邊と淵^邊也^邊其^邊の

功^邊其^邊方^邊何^邊ん^邊ぞ^邊小^邊き^邊ん^邊や^邊重^邊僮^邊大^邊り^邊ま^邊る

○雨^邊之^邊威^邊慨^邊を急^邊く^邊あ^邊別^邊し^邊松^邊雨^邊冬^邊中^邊の^邊雨^邊伏^邊

り^邊し^邊り^邊た^邊る^邊詩^邊人^邊の^邊喜^邊う^邊但^邊に^邊威^邊慨^邊を^邊急^邊き^邊あ

き^邊ら^邊る^邊神^邊の^邊為^邊ある^邊嫌^邊り^邊

○漢^邊方^邊の^邊美^邊ふ^邊く^邊僻^邊境^邊を^邊在^邊り^邊故^邊に^邊お^邊入^邊り^邊

不^邊便^邊と^邊不^邊便^邊と^邊異^邊と^邊然^邊氣^邊を^邊帶^邊り^邊る^邊所^邊却^邊

つ^邊と^邊物^邊川^邊柳^邊子^邊回^邊く^邊徒^邊景^邊に^邊ま^邊つ^邊あ^邊り^邊き^邊所^邊を

し^邊真^邊の^邊なり

○古^邊歌^邊の^邊ま^邊と^邊志^邊の^邊ふ^邊わ^邊の^邊雨^邊を^邊ま^邊る^邊の^邊く^邊れ^邊り

盗^邊取^邊之^邊ん^邊と^邊利^邊し^邊は^邊悪^邊を^邊る^邊男女^邊之^邊の

夏^邊時^邊浴^邊し^邊終^邊つ^邊て^邊氷^邊塊^邊を^邊嚼^邊む^邊神^邊氣^邊爽^邊然^邊に

リ^邊而^邊し^邊浴^邊も^邊氷^邊氷^邊も^邊又^邊水^邊也^邊水^邊多^邊る^邊也

○蘭^邊亭^邊高^邊き^邊を^邊命^邊し^邊曲^邊水^邊杯^邊を^邊流^邊し^邊る^邊歌^邊を^邊採

る^邊洵^邊と^邊い^邊千^邊古^邊の^邊雅^邊也^邊我^邊邦^邊往^邊時^邊之^邊の^邊傲^邊也

不^邊便^邊と^邊不^邊便^邊と^邊異^邊と^邊然^邊氣^邊を^邊帶^邊り^邊る^邊所^邊却^邊

つ^邊と^邊物^邊川^邊柳^邊子^邊回^邊く^邊徒^邊景^邊に^邊ま^邊つ^邊あ^邊り^邊き^邊所^邊を

し^邊真^邊の^邊なり

○古^邊歌^邊の^邊ま^邊と^邊志^邊の^邊ふ^邊わ^邊の^邊雨^邊を^邊ま^邊る^邊の^邊く^邊れ^邊り

盗^邊取^邊之^邊ん^邊と^邊利^邊し^邊は^邊悪^邊を^邊る^邊男女^邊之^邊の

夏^邊時^邊浴^邊し^邊終^邊つ^邊て^邊氷^邊塊^邊を^邊嚼^邊む^邊神^邊氣^邊爽^邊然^邊に

日古来之り、倣ふものやうく、而今なき無し
惜也

○舟上の遊と趣あるは秦淮より今あるは西湖を浮
ぶと聞くと我が舟、又之れを倣ふは江戸時代（一）に於て
載せし舟遊を考へしを常とす舟遊を考へし
この興酬として割烹店に入ると又一段の興隆快
と趣ある故に舟の遊する所は著名の割烹店を
り、又八百善（三）谷曰く橋本（亀戸）曰く、鮮肉
（深川）皆ふ舟遊（舟遊）橋を賞ちるといふも
舟と連然と保つてあり也

○東坡の舟遊は赤壁の舟遊と云ふは光彩を
添へたるもの又舟遊の模範として、今も後世に
傳へし土俗名物の如き此舟遊を浮べたるも以て
家例として傳へし秋月種村は一冊を著せし
舟遊東坡を舟遊の如く家例として風流社中
曰舟遊は飲酒吹笛相樂候此節は彈正基
之巨擘、縁し是舟遊堂々として出掛申候河
西三又遊去と云ふは流とあり

○舟の趣味を添へし、主料外のもの、及び例
へば兵の如し海戦（舟）、昔（昔）し陸戦の如しん

趣味あり也

(夏の照田川)

○昔し紀文ハ墨書者ニ數百千の白扇と流し（打）

いと紀文ハ碇一舟の趣味を知ふとの墨書

又白扇を流す物もぬをもえよ維新後入るも

墨舟ハ流燈のすゝあり而して今之無し

○月ヶ瀬の梅の天下ハ名高きも亦あるは依り

舟ハ流の糸谷皆に梅樹中ニ一給梅幹

木樹密生枝幹垂れし舟のふふとのあり舟

ニ挿し之れを賞すんば花氣舟中ニ倒射

し舟も花中ニ立ち其の枝の舟を走らす也

於し御心とを挿して春めはおのづから（移）

の香あり

○御里附近の僻村ハ清方あり余帰省の途次必

し舟とせしを挿し（千）挿して春も花を以て

染きたるハ四方の岩田を以て之をきく（新）

備斗（満）ハ...

千十年來幾十年の...

三伏の候ハ...

余帰省の途次...

一茅舎を想ひぬ 之れを 挿し本を例とし西
行の「とく」と為る 此の けは 此の あり
る 此の 七 此の 南 此の の 此の 五 此の 一
入 此の 味 此の を 此の 感 此の ず

○古人云く 釋史之難、莫如釋地、釋地之難、莫如
言形と其の然り、此の 地 此の 域 此の を 此の 界 此の し 此の 形 此の の
佳地往々変更 此の 動 此の 性 此の の 此の 者 此の と 此の 足 此の 度
として地を 此の 界 此の ず、此の 方 此の 史 此の 又 此の 善 此の し 此の う 此の さん 此の 心
其誤と終る釋地 此の む 此の ぶ 此の 方 此の 史 此の 講 此の を 此の さ 此の る 此の 可
の研鑽を 此の 忍 此の 清 此の の 此の 附 此の 可 此の ず

○余吾余余の古蹟を花より一行者きくし 此の 千 此の 美 此の 次 此の 萬
日陸路漸ニ美次歌中の一句を抄す 此の 回 此の 々 此の 千 此の 美 此の 次 此の 萬
美次江西水と茶人の書 此の 林 此の の 此の 後 此の を 此の 走

此の 山 此の 根 此の 秋 此の 水 此の 浄 此の 冷 此の 々 此の 燒 此の 到 此の 中 此の 心 此の 自 此の 醒
陶元亮 此の 西 此の 舟 此の の 此の 殘 此の 舟 此の を 此の 海 此の へ 此の 刻 此の 胸 此の 襟 此の 一
洗荆棘、此水也吾師丈人笑 此の 見 此の 光 此の 由 此の 水 此の 霧
尚休荆棘を削くと得 此の 表 此の して 此の 此 此の 人 此の を 此の 走 此の 山 此の 舟 此の を
親せし 此の は 此の 激 此の 賞 此の 其 此の 一 此の 舟

○余鷗波の露を咏するの詠を受し 此の 亭 此の 入 此の 之 此の の 此の 痛
す 此の 回 此の 々 此の 凝 此の 荒 此の 瓊 此の 脂 此の 敷 此の 似 此の 泡 此の 團 此の 々 此の 綴 此の 得 此の 宿 此の 草 此の 巨 此の 茅 此の 萑 此の 葦

走上青秧葉、清夜滴来丹桂梢、月下濃時虫語
咽、花洲濕處蟬魂交、最憐冷淡野塘曉、萬
點荷珠風裏拋、

○水に配し七趣をあり草木曰く楊柳曰く萍蓬曰
く曰く梅曰く楓曰く松曰く竹曰く薔躑曰く梅曰
曰く葦菼曰く河骨曰く荷花曰く萍曰く菊曰く
杜若花曰く海棠曰く山吹曰く草

○向嶋にト居る友人前年水言に遇ふ余之れを訪
ふんとする人ありと曰く羅華畢提附近の舟を皆
と即ち飲田河岸より一船を僦ひ茶溪を遊し畢

水に入ら濁水瑯漫花に海の如し漸やくと
しと友人の舟を抵り水と床の上を浸すこと

日本此家二階あり唯この柱より高く材木を
築し畳を二枚敷き床の隙に中二階あり
来り舟の侵す所とす主人こゝに居る余の訪

ふ時主人偶々一客と對坐酒を飲む余を麾へ
て曰く請ふ舟を此處に繋げんと見れば即ち

床間の一處に作らんや明り取り也余坐入りて
水難を吊ふ主人は落物を拘むが曰く水を
下物とて飲むも一興也唯此敵手を得ざる困

去折場隅の地の酒定兼の訪洲へ遇ひ今を酒心
と酌ると酔中の表を余は紙衣も主人殿へ余
臨時酒令を設けたりし他より水暈一寸を増す毎
に酒令と命を死かと柱邊に白墨を以つて二三の
線と引けるを指さして曰く今朝五線を引ける
に二線と既く水中に在る他の三線も刻々
形中へ没せんと余笑つて四邊を見れば家具も
脚も足場も傾き崩れしと立ち移る在る家族
味も兼首と鳩めし臨み室の扉の一隅へあるや
と世に大の同告し居る七奇也主人曰く酒を度
△

具取
と撰
つ

の八月廿七日午前六を寺終行る訪の隅に坐す一
定爪来云に異振るる人のおかみより初め
て傍のあふんばらばらととあるをゆゑる年
對五十位振るる朝舞のふらむし筆
を揮て白紙の單衣を白地金襴の帯を帯
め里帯紋付の羽織を着し胸をぬき人用
の巾着のくさくさ(金襴)をとるるをさげ
ぬるるもにぬけたりいひまゝに彼れを帯つる
さまの印を托しあるに此印余のおかみ
一といひ渡政の大西箱梅の印をいふことある

宗道帝才ニ皇位の玉璽を譲りしとアウンバラ
輝い得てより(の)おとあつ(の)私印と云ふ
と卷六の括弧()の目()のち()の刻()印()
とを特()未()ん()ふ()う()と云()ふ()印()を()印()を()特()心()
置()し()と()う()う()括()ら()る()ま()ま()き()あ()る()大()教()を()云()ふ()
の()五()字()既()に()凡()を()久()が()み()う()と()刻()し()あ()る()卷()六()
の()ま()ま()の()信()は()は()卷()六()十()本()を()あ()ま()き()ア()ウ()ン()
バ()ラ()バ()例()の()昔()も()提()拈()の()末()ま()ま()の()ま()ま()入()ま()せ()
ま()ま()と()余()を()あ()ま()き()う()う()獲()た()る()文()珠()の()鈕()の()
印()括()二()顆()の()卷()六()の()刻()を()も()い()ん()と()を()括()り()ま()せ()

こを出し示すゆゑに家祖徳海翁の卷六の
家祖茂香の刻り傳ふもの一點を出し鑑定
後款と刻せんことをもとむ、アウンバラと
其せいろく()の印伝と云ふ由卷六を報ふ
くく教主と而もま()き()丸()晶()の珠教と云ふ入
ん()ん()た()ま()此()の珠教を()日()余()の()あ()ま()の()あ()る()あ()る()
と云()ふ()三()代()を()括()ら()う()母()の()あ()ま()の()珠()教()の()ま()ま()
珠()の()大()師()の()心()伝()の()傳()を()監()刻()し()ま()す()こと()を()
中()井()教()主()の()あ()ま()の()傳()中()に()あ()る()ま()ま()の()獲()た()る()
う()ま()ま()印()り()る()其()の()珠()教()を()う()う()ま()ま()の()あ()ま()の()ま()ま()を()

得るをみるアウンバラ勢ゆるしと目ある花
二重うらな獲ゆる毛より数々の香を示さる本廿二
尺幅一尺施の紙ある一寸四方位の行体入符
好首をちきさるゝもの珠くしきゝもの也花の
又虫癖の印材数顆を押し示す多くは凍る
るも四顆刻まるを指し中一は梅の鈕三顆印
安田善治印の常々依つて刻し不用な癖し
る未だすう漬する趣くも其供なるしある
一顆安田善治印一顆空りた人と
あるし、らん安田の比見え空りたる

漬さるる雪くへき點午時例の雪方指し料
地は雪の雪方と引けしとる雪
る善治のぬれを借りきけするは玉葉
しゆくまゝの家を移しあはるる庭き前
の地中より雪くくちるも花あるし料地
ゆくゆく改めゆる花入るるへはるも腰の
ハオビうらな小坊主出入りしを肉施
するさま花ゆるるも花とるも花は花の大
西程梅を流しし時のこといも流りりぬ
一めとるる袂をおちりるも

○別乗して一〇及あるとまじし籍冊の付あ
 るものとき表層を常しと過る於紙のゆくゆくは
 ずしむ及取中一余りの継年日衆微院飛を
 いたる多ひしおの文書七のくくう出なるが
 印刷部として両方きこもの一片を得たるものと
 味方と論争の焦点にきし余の治る格別題と
 注し敬を治る格と云ふ我の之ぬくくと并
 出するに於ては、^{印刷部}同一印刷部と托し
 二版として二版を一紙印刷する未田ある
 とも一回一印刷所と托しける結果一巻と双方

のこの印刷しき^{印刷部}多し^{印刷部}に於ては、
 て中央より裁断し双方の信託を領つ^{印刷部}
 ちん^{印刷部}と流版所^{印刷部}に於ては、^{印刷部}裁断前の印刷部と
 打ち物^{印刷部}よりなるも即ち半紙に於ては、^{印刷部}
 し^{印刷部}その^{印刷部}改換^{印刷部}た^{印刷部}却^{印刷部}の^{印刷部}なる^{印刷部}之^{印刷部}の^{印刷部}なる^{印刷部}
 の^{印刷部}感^{印刷部}自^{印刷部}家^{印刷部}の^{印刷部}なる^{印刷部}土地^{印刷部}狭^{印刷部}隘^{印刷部}の^{印刷部}
 二^{印刷部}於^{印刷部}ける^{印刷部}流^{印刷部}版^{印刷部}所^{印刷部}の^{印刷部}情^{印刷部}態^{印刷部}も^{印刷部}なる^{印刷部}而^{印刷部}向^{印刷部}味^{印刷部}なる^{印刷部}
 即ち^{印刷部}こ^{印刷部}の^{印刷部}ぬ^{印刷部}め^{印刷部}る^{印刷部}高^{印刷部}の^{印刷部}地^{印刷部}念^{印刷部}と^{印刷部}なる^{印刷部}

○内氏古金録(講)二六七冊瑞世万花古銅器并
 款説を載り彼に於て五五部限録約出版を
 うしなうその文未を辨るべく余も一見す此の
 書中一珍く一き一回を其の上へ祭器を飾
 備けたる圓を以て祭器の陳列飾り付順序を
 記し支那考沈家より未種々の説を以て
 實を臆視するにききかへて實地を言はざる(2)
 とむき存しなむる如く瑞世万花幸うして
 土中にも祭器の臺の上へ飾らるるまじき
 振出したるも、よんまよる尊の器も、是れ也

のまじらまきあり。判明し考證するに利益を
 興くするにあり。このまじらまきを載せる
 殊く一き圓を以て別ち是れを、日本流
 りと考む得る。位置、四角、八角のもの
 あり。圓の示す所は、伝は十二三むらうの
 ろう、祭器と其至一がい、或は、或地を
 のことず。圓、八角、八角、八角、八角、八角
 である。祭器の流し、祭器と自家の名を
 此の体も刻せり却つて相接する。他の器の名
 を刻する慣例あり故に、此と刻し、此の

と見え其の書名と心得て誤らうと云く
り更なる考あふし

○置振玉名ひりりく来くしお又本を西
清研講の在るをもるのたのふ書名
府に於ても今別く所の者より願くは本四
、日送り戻せんゆり云くりとて支那帝志
の御府より一本あることと書し由標洲南の
はきしことあることと書し南置氏
の書き且つ本四へ戻せんことと書し
くぬ所より北書と二千冊と書し三年版し推ん

七傳の書名もあつた平五しと書き
二冊の書名の清書入しと書き又は平書
の價も二冊ありと書き
書名も二冊ありと書き
と書き

○あしとをことか本骨董は
書名も二冊ありと書き
方々を在りて掘り出し
回書の内ぬえ泥土の
物も二冊ありと書き

八梅よりつと甲の言うるをぬ 續くよ也 土ま
 らせメとと十の言見しりくととくし七五の
 と梅ひの言も 言ひる言も又申言を昔し
 うしあを言ふも 言ひる言も 梅ひの言も
 ちひの言も一個六七の言もしし言も 此の朝
 新に梅り出ると言はるる言も 方お素
 る言も一梅を言ひる言も 梅ひの言も 泥
 土を言ひる言も 言ひる言も 言ひる言も
 土や言ひる言も 言ひる言も 言ひる言も
 を言ひる言も 言ひる言も 言ひる言も

とらんを 梅ひの言も 言ひる言も 言ひる言も
 の言も 梅ひの言も 言ひる言も 言ひる言も
 出ると言ふも 言ひる言も 言ひる言も
 きんの言も 言ひる言も 言ひる言も
 梅ひの言も 言ひる言も 言ひる言も
 の言も 言ひる言も 言ひる言も

百水一筆(つゝき)

と婦り子唯比閉口するを（つゝき）其塊の眼下に流るる
 こと未ださういふ温精の氣候を腐敗し一日
 数回炊きくの不便ありといふ蚊蠅の視往々
 半日を脱し蚊若しむこと甚しと

○野渡の趣あるもの衆人舟を争うことよめ

船中よりいふことん業中の白路江に映して元

邦（つゝき）の深夜獨り沙路を三つ

し船を喚びし人も人なきを江烟水を（四半の）前岸

をるす唯比舟を聴くの光景も一種懐懐

の國をくみはやく

○秋水と澄徹瑩の如く一行の趣ある紅葉の

日風の随つて波舟上の又波と清も村上

佛山の清く早秋水磨の鏡、其澤映照の

漁翁舟網子、紅葉多於魚と秋舟の故を得

り

○古来元瀑のゆきしをみと吳梅村の五絶の詞

くしと念をも多す回く亂瀑界蒼厓、松の

吹雨急、石廊、忘る人、高寒不能三、
村居の景の佳るるあり 雨後尚方山岸を衣む、日景 洲流清く馬と浴

す、村娘柳おの蛙影を汲む、雲 光

童舟中くし怪石を拾ひ得て娘く、白雲 野水

登り村と重牛、日景 飲の甲、村中 の村と茅の

舟、舟 通す、舟 回く家貯水、舟 遊ぶ、舟 回く農夫雨下

草を採る、舟 水色野花を揮ふ、舟 回く舟清流

秋と澄の一と樽拵、暇 ありか

○舟の操縦古来人の難くする所、但し平地の舟

と操縦する法、漸 やし備へると若し舟と立ち登る

舟の法、別して急卒、時 あり、舟 立ち登る

の法、日 今後の研究を要する舟と、舟 操縦する

高きと致すの法備らざるは大坂のこととき大火の
再び起るを必しおそれたるの如き又十分の便を得
可くし

○水族館と趣味ある一種の教育機関也唯此の
の規模の狭りたるを憾む

○蘭亭高士を會し曲水杯を流して歌を採
つと千古の風流我邦古來未だ人の之れを倣ふ
しうもて而して今や此をうし惜むるべし吾ん

ハ自世界の海を曲水と擬し自りも會集をま
り流るる列國を誘ふる世界師會多しと云ふし

世界的曲水の趣を兼て欲するは都府の湖

き蘭亭の法に依り須要の湖を採り之れ

を各處を射附し互いに習力を開はすの

をいし其の興味あるを愛する世界の士

誰んが此の盟主たるを

○^編餅花を^{生け}、玻璃器と魚を養ひ、陶

器に石菖蒲を置き、或は假山を作り築き

或は假池を通し橋を架し舟を流し三人寸馬

を置き自然山水の趣を尺許の盆中と収むは皆不

方の不品なりし、我邦の如き各戸庭園あるべし

時を以て

に如斯くも或人と用を為さざる然れども屋敷層
を^品めぐる未未の家屋は於ては儼然たる品
山方用をさしむるも驢目の具とて大い
用ありし

○水の大畵と云はれ水と云ふ要比較の後也日本
の自然山水は比するは尺盆の山水を小品とん大
陸の大山大舟を以て我う山水を見れば皆あ
品と中の山水の如きものありん吾ん^鳥四なる
従し未だ大陸の大山舟を知らざる百水と業
を^水に^小品の如きを叙するも止るも地あり

小懸塊の禁へる所也

○泰西の人水の趣を言ふを極むるはラスキン
は^アウ^アン^グイ^リありし、梁茅の草と^肉通
織細を言し又^視察の微の事^東洋人の遠く及
ひ難きことあり、ラスキン^東水の微水の流るる状
を叙して

When water, not in very great stry, runs
in a rocky bed much in tempestual
ly hollows, so that it can not swing
now and then in a pool as it does

along, it does not acquire a continuous velocity of motion. It paws after every leap, and curdles about, and rests a little, and then goes on again, and if in this comparatively tranquil and rational state of mind it meets with an obstacle, as a rock or stone, it parts on each side of it with a little knurling foam, and goes round.

if it comes to a stop in ~~the~~ ^{its} bed, it leaps it lightly, and then after a little following up the bottom, stops again to take breath.

ハナハシーン ◆ 可羅の感如の節一に

whenever lurched at from a height, it seems like some precious silver - held in an emerald chalice - a gem set in a frame of shells and forests.

又四八

The mountain-lake is nature - pure, simple, and undisturbed. No one can fail to admire it and love it.

It is one of nature's brightest jewels set in her green garb of hills.

河内を其の源泉とす美の源泉
の天地萬物の生成と成るとを始とすありとを周の
水の解の天一地二の言ふ據りと末儒の立てし説
らうと曰く天一生の地三成水と地萬物の生成

と折しとあり得と一山に成るたから自ら現を
一とあり

〇ヴァンダイソ西の折りと降る状を叙して
云々

At the beginning of a mountain the lakes are few and large, and they settle to the earth like cider - down or thistle down. Nothing can exceed the gentleness of these first-falling lakes. They retreat and flood and burn and

fall so softly, that not wheel or grass-
blade is stirred; and they melt into
the smooth surface of the lake
without making the slightest ripple
impression. And how absolute the
absence of their fall!

又 如 雲 霧 之 散 也

And what a multitude of sharp angles,
harsh forms, and stark colors

are hidden under the muffling
of snow! The jagged mounds, the
rough cornfields, the tumbled moun-
dous, the busy forest-hills of the moun-
-tains are overlooked, and covered
over, and cast in new forms. Every-
-where there are flowing, rounded
lines running hither and thither to
meet other lines, intertwining and
uniting in graceful and rhythmic

Combinations, &c &c

○洞庭張山人云、山頂泉輕而清、山下泉清而重、石中泉清而甘、沙中泉清而冽、土中泉清而厚、流動者良于安靜、負陰者勝于向陽、山剛者泉宜芳、山秀者有神、真源在味、其石無香、山名揚州寺一處石川名海

○太宗朝李季卿刺湖州至維揚遇陸處士汾漸李素熟陸有傾蓋之歡因赴郡抵揚子驛中將良李曰陸君善茶蓋天下聞揚子江南零水

又殊絕今者二妙并載一過何勝之乎余軍士位僅者掣鐮操舟涉淮南零取水陸澤器以俟俄水至陸以杓揚舟曰江則江矣非南零亦似臨岸者使曰某梓舟洋入見者累百人敢給乎陸不言既而傾諸盆至半陸遽止又以杓揚之曰自此南零者矣、使灑然大駭馳下曰某自南零之齋至岸舟過半懼其劫挹岸水以增之、處士之鑿之神鑿也、其敢隱欺乎、李大致與李云、太平廣記
○其沸如魚目微有聲為一沸、緣之如湯泉連珠為二沸、騰波鼓浪為三沸、至此

○花之養如人之植也。花之好之者。其亦賦而
不也。忘其水。表完者。瓶中之花。其亦賦而

○京師風雨驟時。作空。德澤凡之。上每一吹。強。元
埃十餘。瓶底之困。平。此為最劇。故花須註。日一沐
云。浴之之法。用泉甘而清者。細微澆注。如微
雨解醒。注露潤甲。不可以手觸。花乃指尖折
剔。亦不可附之。膚。如猥。如。然其花性不耐
浴。必以輕絹覆之。之。龍。史。

○歐陽修云。世傳陸羽茶經。其論水云。山水上。江次
井水下。之。其說止於此。而未嘗品第天下之水。味

也。至張又新。為煎茶法。亦記始云。劉伯萬。謂水之
宜茶者。有七等。又載羽為李季卿論。其水有二
十種。今考二說。與羽茶經。皆不合。云。

○劉伯萬。水七等云。楊子江南。雲。水。一。每
錫惠山寺石水。才二。蘇州。魚。寺。石。水。才三。
丹陽。新。觀。寺。水。才四。揚州。大。心。寺。水。才五。
吳松江。水。才六。淮。水。最。下。才七。

○再雅曰。水中可培者。洲。水。洲。曰。清。凡。水。也。皆。曰。涯。
曰。畔。曰。干。曰。澆。曰。澆。淡。重。涯。曰。岸。岸。上。地。曰。澗。
曲。涯。曰。澳。曰。隈。土。過。水。曰。塘。水。傍。曰。波。小。波。曰。淪。

平波曰瀾直波曰涇水朝夕而至曰潮風行水成文曰
連水波如錦文曰游水逆流而上曰汭迴順流而下
曰汭游絕流而流曰亂波方復曰津游行水下曰
泳

○北極の極点即磁極磁南下する点果して陸に在り
近世各洲の探検隊相越えたる探検をいつと見るも皆
目的を以てして行はれしと志しく仰ぐ但し目米のウヰグス博士
初めを目的とせし得たる者米のウヰグス博士と云ふ
み探検の要として北極を以てす也陸に在る人数
多くは氷に下りて北極を以てす世界中のありし初

りて人おの接あししは北極也

○甲本の世界の山岳と云ふ人間の春の
能はる所を極とす。唯此之れを証成して世に出
ずともと言ふ事世に極とす。近來言ふ事漸大に
進歩し著しく人の接あする所とす。之れを探検
する範圍を度するも、之れを學問のせる人も又
之れを果し再來埋没するも、山岳多し世に出づ
ぬの事と見ゆべし

○木曾路十三驛余嘗つて之れを踏破するに七の
是ヤチノ日ノ経色する所ありしに、

我れを送迎するにのみ

趣と異るべしと日々部々^{我れを送迎するにのみ}と離るる能はざる
者木曾一節の法法^{てきん}と取つて
勝と論るべしたのち科^{てきん}と送る即ち之れを甲
の屏仙峽丹の保保^{てきん}の元龍^{てきん}に比し却つて或
ハ趣もあつんとそよおれんと全向^{てきん}と見んば
言ふ既おと謂のちと防けお其もま^{てきん}並るもを
帯ひ寝覚のちのち^{てきん}織細の鬼^{てきん}と刻るもよめ
之れを月解^{てきん}のちよき^{てきん}二角^{てきん}とる^{てきん}世帯^{てきん}地の
横柄のぬし^{てきん}藍地^{てきん}のち^{てきん}茶^{てきん}や^{てきん}瀧^{てきん}や^{てきん}橋^{てきん}や^{てきん}布
買^{てきん}と^{てきん}澤^{てきん}出^{てきん}し^{てきん}と^{てきん}言^{てきん}近^{てきん}き^{てきん}流^{てきん}る^{てきん}矢^{てきん}ち^{てきん}う^{てきん}幾^{てきん}塊^{てきん}

の流るる自^{てきん}と^{てきん}幾^{てきん}塊^{てきん}人^{てきん}と^{てきん}目^{てきん}と^{てきん}地^{てきん}の^{てきん}茶^{てきん}あ^{てきん}る^{てきん}
善し友禪^{てきん}一^{てきん}心^{てきん}中^{てきん}の^{てきん}絶^{てきん}也

○叢刻を以つて山あり^{てきん}群^{てきん}山^{てきん}と^{てきん}朱^{てきん}字^{てきん}の^{てきん}四^{てきん}
刻^{てきん}る^{てきん}も^{てきん}丸^{てきん}と^{てきん}白^{てきん}字^{てきん}の^{てきん}四^{てきん}刻^{てきん}る^{てきん}も^{てきん}朱^{てきん}白^{てきん}の^{てきん}字^{てきん}の^{てきん}四^{てきん}
と^{てきん}刻^{てきん}と^{てきん}み^{てきん}る^{てきん}こと^{てきん}と^{てきん}山^{てきん}あり^{てきん}凹^{てきん}凹^{てきん}の^{てきん}各^{てきん}と^{てきん}故^{てきん}と^{てきん}も^{てきん}
す

○日本は^{てきん}の^{てきん}其^{てきん}の^{てきん}面積^{てきん}より^{てきん}其^{てきん}田^{てきん}圃^{てきん}より^{てきん}なる^{てきん}洋^{てきん}海^{てきん}と
なる^{てきん}所^{てきん}あり^{てきん}が^{てきん}大^{てきん}海^{てきん}洋^{てきん}四^{てきん}環^{てきん}する^{てきん}が^{てきん}故^{てきん}に^{てきん}日本^{てきん}國^{てきん}之^{てきん}
常に^{てきん}水^{てきん}蒸^{てきん}る^{てきん}氣^{てきん}を^{てきん}以^{てきん}つ^{てきん}て^{てきん}梅^{てきん}つ^{てきん}る^{てきん}況^{てきん}ん^{てきん}や^{てきん}暖^{てきん}る^{てきん}里^{てきん}瀬^{てきん}と^{てきん}暖^{てきん}
ある^{てきん}印^{てきん}度^{てきん}洋^{てきん}上^{てきん}の^{てきん}氣^{てきん}候^{てきん}風^{てきん}ハ^{てきん}蒸^{てきん}発^{てきん}を^{てきん}助^{てきん}け^{てきん}て^{てきん}致^{てきん}す

へきま量のお蒸氣を作ら且つ吹き送つて四土
を縦断して背體形をみす大山脈は撞觸して凝
結し雨と雪とをまじ、地帯のたを急勾配をた
たしと無数の川をまじ、湖をみす日本を水
のまき山土無し全土を流すと大國ともいふ
証言をまじりて

○お蒸氣をまじりて大なる美術家なるは其の作るの重
くもそのまじりて河湖をまじりて虹橋をまじりて
霞のまじりて暮霞のまじりて彩雲のまじりて六花のまじりて紅葉のまじりて
河湖をまじりて 蒸氣のまじりて
お蒸氣のまじりて地動植物のまじりてお蒸氣のまじりて

つらの一と春つらに風あふ

○水々大なる、彫刻家なる、染筆雨とまじりて

深きまじりて種まじりてまじりて倦りまじりてまじりて

探りて、まじりて、まじりて、まじりて、山を削るまじりて

穿つ河を開き、山を作らう、まじりて、巨谷を揮ふの

まじりて、まじりて、細谷を揮ふ、彫鑿し、まじりて

まじりて、怪石、まじりて、起る、或は、山柱の如く、まじりて

まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、或は、まじりて

まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて

まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて

この地は仰き或は俯し或る是は或る地し或る地上
水上の或る是水上の作らん其し其の地ハ位地
危き其水上の是落んとし其の地ささく作らん
其の地ささく山に柱を元保を懸け河に柱
とて高岸を或る是其の地を削り海に柱
とて澳港を或る是其の地を削り螺旋状に
削りて長嘴短嘴先を差出すて海岸の
美観を、海内は其の地の彫刻の結果あり
ささく

〇以上の彫刻を地地と云ふは浸蝕と云ふ地の

浸蝕の軟質の石灰岩と云ふ比較的容易な行
はし故に怪気亭の殊に石灰岩の多くあると
是の地形も奇抜とて雄偉の氣分ありと云
固岩の或るは固岩の地質堅硬、容易に形
浸蝕したる所と云ふ然れども天の倦らるる
断つ向うと云ふ浸蝕の終つ抗つる能はず
天の彫刻の甚しきもの其の地形の美を云
日この地は其の地質堅硬の彫刻を生じ觀る
の彫刻の甚しき處一ちしと云ふ其の地
思ふこと

○友岬高波の残塘江に移ける満潮の後の潮
の推し入るる勢を言ふ壯觀也○此江又或る
尺の厚壁との潮を獲たりし海浦のこゝに入り
来りて人の所滑るこゝに毛竹十餘本あり
半折漸と流しつゝのこゝに又毛竹とが井
禾原に止まりてありて終る
○此世の物さうく死にの度より書行つ海なる
世の深處よりさうく風をいそぐは是れ水蒸流
の爲す能く業々ありて移る改りしうゝとて
此邦人其を解し難し

○嶺南の南々の松ののちとてさうく海峯の
みどり葉の暁を凝しそんはる也嶺南の
土地よりさうく地上を離れてるかの所
るを言ふこゝに又水蒸流の業々
○五峯の作るまゝ他嶺南波龍氣動一池を
影に流し又一粒の水景観をいふ押し
五感あり
○海上波躍り白浪花のちとて穴れ白尖ありこ
とき観をみるるとき舟師戒めて船を止こ
するし○波濤高き海路危路り微とる

支那人の曰く是れを白路と云ふは其の
 白兔寧ろ言ふと云ふも也。一符の流の
 出づれば上白兔躍るの景ありし波の景
 亦終る言ふは此し此の意あり。是れ
 ○支那人の役斗ありと云ふは、洲後
 所を此の曰く凡天下之泉三億三
 十有九其在區區一域故不得命也
 の男女而を投擲するは、投擲と云ふ
 七餘款行り出づれば、投擲之投擲
 遊遊の云ふは、其の意

○管子曰齊之水道躁而復故其民貪廉而好勇
 楚之水淖弱而清故其民輕果而賊、越之水濁重
 而洎故其民愚疾而垢、秦之水泔最而穉淤滯
 而難故其民貪戾罔而好爭、齊秀之水枯旱而
 運埃滯而難故其民諛諛諛詐巧佞而好利、
 燕之水萃下而弱沈滯而難故其民愚頑心而好
 貞、軒疾而易死、宋之水輕勁而清故其民剛易
 而好訟、是以聖人之化世也其解在水治於世
 也其紀在也

○人其地と人其の冊と是れ其の地

を富しと未だ精確なる
中々や土地ありと雖も^確未だ^確人類の生息の
にせり唯此の作^田を依りて土地を^耕し
に初めて人類の生息を得^耕は^田形も

汗 起 所 田 洗 耕 田 形

寧ろ人類の母と謂ふべき事
○人類の生息は水無き一のしが死んども人類の
力腕の微細の時代は格も大兵を未だ築集の
制御し得る事ありしを吾も大兵を築集の
敵しし尤も避けざる所あり築集の地を
る所滑る事ありの形ありし 京都の都を

築 集 水 無 一 死 類 力 腕 微 細 敵 所 滑 京 都

いんは路を筑し又も最初と西山東山あり

路 築 西 東 山 山

と略すを其の人類の生息の形ありしは
河を夾りて市街を建ふる事ありしは
人の力漸ゆく進み大兵を制する事ありし
後の事あり

○に徳幸の治集を初し之しは初めを
大和に移すは其の治集の地ありし水なき
の文の史を初の操能史を初し人類の初めし生

〇を圓ふや大なるを越すけむを漸し易きを
 漸ゆるを漸ゆるを以て居る地の漸ゆる近ら
 従ひ治す大なるを利用し丹桂使用
 〇而して文の金にせしむる果ては不
 〇を狭の自在を之を物し今もあるべきや
 〇舟を運ぶに利用す舟の給料も
 〇抱ふる文の付る所の通船も
 〇日本は堤防のたも早く飛ちんを仁徳
 〇羽の内の故を最たしむる地を地遊せんは
 浪を舟に下る浸す都を治す舟のつりきい

〇此の給料も
 〇文の付る所の
 〇舟の給料も
 〇舟の給料も

〇結果凡そを得ず世防は言えつた
 〇人類の生るる地を地理の言
 〇移るるも現在人類の存する所は地帯も
 〇或は偶に此の地帯の存する所は例は足
 〇尾の上の幾万の人の居住すること
 〇り似たりぬれどもこれ利是出統地帯と
 〇穩とせんがより文の自れも清り結集
 〇かゝるるの心

〇中核層の在りしと人類を習ふ法
 〇作るるをたす御し人本に人類の

了所以此の中務層々名の力入候て馴成也
 了しものうそなき拵身成の半一途うそなき死
 んも人智の心なきうそなき急来うそなき
 中務層々の不究候を述へ補是しもの心
 の太古を及ぬ人を制する人文漸やく進むる隨以人々
 進みぬの制取を免るん文の意高なる進むるに比人
 終る人を制するに至るん又文の史上假しを及ぬ
 一西のすまゑ
 の北海及び南を言ふことよきもの明るる平の

此一見人のせうくする所とる輕く之ん人々
 を捕ふ候うとも其意其体の業殊るうそなき
 此アイ又の一二此人を捕へる地陣中を捕へ
 て人を捕ふ候て業を言ふ事し候るアイ
 又と地北海各の先ぬ人々を以り又地を以り
 〇釣を目的魚を釣ふ候る候も又も又も一也
 候も又も又も目的魚を以り候も又も又も一也
 候も又も又も一釣釣出淡法自釣出
 千秋前古心是ん志を樂とらるる意魚を在り
 候も又も又も一釣釣出淡法自釣出

○水の字を三つ兩人交一以中出者一ハ教の如く兩人
男女の交る陰陽物の交り一と以て起るを云
ふ也

備考 春秋元命苞曰水之為言溼也陰化溼
濡流施潛行也故其字字兩人交一以中出者
為水一者教之如兩人交一以中出者
以一起也

○北陸雪候麓溜皆氷條と云ふ初めを釘の
こゝろ去さ僅うん三五寸漸かく大目と云ふ根
杆の如く其の徑二三寸と云ふ其の長くと甚く是

あつし垂下地を連りてん氷は玻璃行、日光之
んを照くを以五粒灼燐目を奪ふの過地の人の
知くても是の事

○氷條垂下地と違ふは、
かく大を以て終る相接し、
障を為す更くは、
障を為す更くは、
障を為す更くは、

○北陸雪中一機を用へし物を運搬する大なる
氷條を折つて二三と云ふ、
心くさきものも、
事々々

○錢塘候潮圖云潮至每月二十四五漸減二十六七漸
生至初三漸大不差頃刻惟八月十五獨大常潮
遠觀數百里蒼素練橫江稍近見潮以高數
丈卷雲捲雪混之底之聲如雷鼓狻不足以形
容之每年是日遠近士女來觀舟人漁子亦滿
船浪謂之迎潮

○姚寬曰或謂四海潮皆平惟浙江湧至則巨如
山岳奮如雷定北冰岸橫元雪崖傍射澎騰
奔激其故何也或云夾岸有山南曰合龍北曰赭二
山相對謂之海門山岸狹勢逼二河而為湧矣

○海の研究者之間近年海産電線を數くに
と谷田の行へん其の結果海産深淺の測量漸や
く歩を進めんとし而して現今尤も最深の意を稱
さるゝ海を南洋のニエーデルラント附近とて
水深三萬尺に達すとす小三萬尺と云はる
七萬尺の深さより二倍と云ふを電線探査
すべし

○邦産家の後進者として日本の人口五千萬の内總
業者の半に於ける若人即ち人口五千人に對し總業
者の半に於ける若人即ち人口五千人に對し總業
者の半に於ける若人即ち人口五千人に對し總業

明とニろ上十餘人あり即ハ二十人ハ行漁業
 一人の割、世界の何れをみるものもめ新き、多敷
 の漁業ををみる所、是れ日本の地
 の何れと云ふ所、又日本漁業の夜をる尋以下
 の魚を捕るを通例の事、此点又於て
 他國と云ふもの、此の漁業多敷
 原因し又一日本環海、概して甚だ深
 きと云ふ概、
 ○本邦漁業を作るも天啓之朝、始まる、漏刻を
 始めせ

○漁業の最古なるもの、西人吉野崎の事、と
 あり、外國人の心及せ、深きと云ふ、
 日本^の漁業也 (四十尋と)
 ○波濤の最古なるもの、西人吉野崎の事、と
 あり、曰く最なる八十呎、及ぶことありと、大西
 洋に於て、小島も亦、波四十呎、のこき、
 而して波の隔りも、大なる、
 海に及ぶ、即ち大なる、乃至六る呎、
 あり、
 ○海洋専門家を、海の深さ百尋、と云ふ所、

魚界と定め之んを百尋線と云ふ北緯とて微妙な
 ころりも透るるもの植物も育し生るし陸上
 とも流んじは有機を樹の浮物と連し海流の勢
 七海産の道し浪風の变化もあるし波の影響
 七とく云りし生きざる海も日ごとく換るは人
 間と交渉ある海也これより以下も〇日
 潮流もさく植物も魚も亦も或るを生る七
 十海は淺きものこも陸上の砂漠と一般唯れ
 異なりし〇存するものも細微する下等
 生物の類もさく所謂の劣るの〇日

とこのと生ん

〇ツロール云く南極の氷の厚さ十二哩以上
 リとルボック云く之の厚さ七哩以上ある
 べしと云く何んとも南極洋の浮物の
 ありし頃の上と云ふんしわがもハる尺
 の重なり
 〇ルボック曰く一秒時に六十の速度を細微する
 砂を動しハ寸の速なるを亞麻仁大の砂を
 動し十二寸の速なるを流し二尺四寸
 の速なるを流し一尺の田石を流し而して田

鶴の角を名を飾りて之を鹿の松を
一物ゆへに二人の連がとある

○右一の傍後二流ありてある妖術 魔術
より七倍の秘術とあるとあり

○此の茶流二度とありて其の茶流約千
七の倍に増加す而して其の一杯ラムの茶

河邊の茶流より多しとある三十八カカリ
一の茶流を喰ひて雨後冷却を覚ゆと

○本朝会鑑云 大抵の茶流土地之性而從之方

高野 四三十八日

増多(筑前) 四三十八日

名柄川(房) 四三十八日

依合 四三十八日

江合 四三十八日

川田原 四三十八日

相生 四三十八日

千曲川 四三十八日

北中川ありて、その水を、おろし、海に、
を、流し、海に、流し、入る、こと、なり

ローグラムの雲々の水、河邊の氷、夏了時
ハ七十九、カロリシの熱を放出す故あり
凝結する、水と、及つて、水蒸気、は、
及し、氷の、溶解、する、水、の、熱、を、吸、収、す、
る、こと、あり、及つて、水蒸気、を、冷、却、す、

○日本の大川二十五、最も長きもの信濃川、
利根川、その次、七十三、石川、六十九、利根川、

次、三十二、北上川、二十、天龍川、十五、利根川、

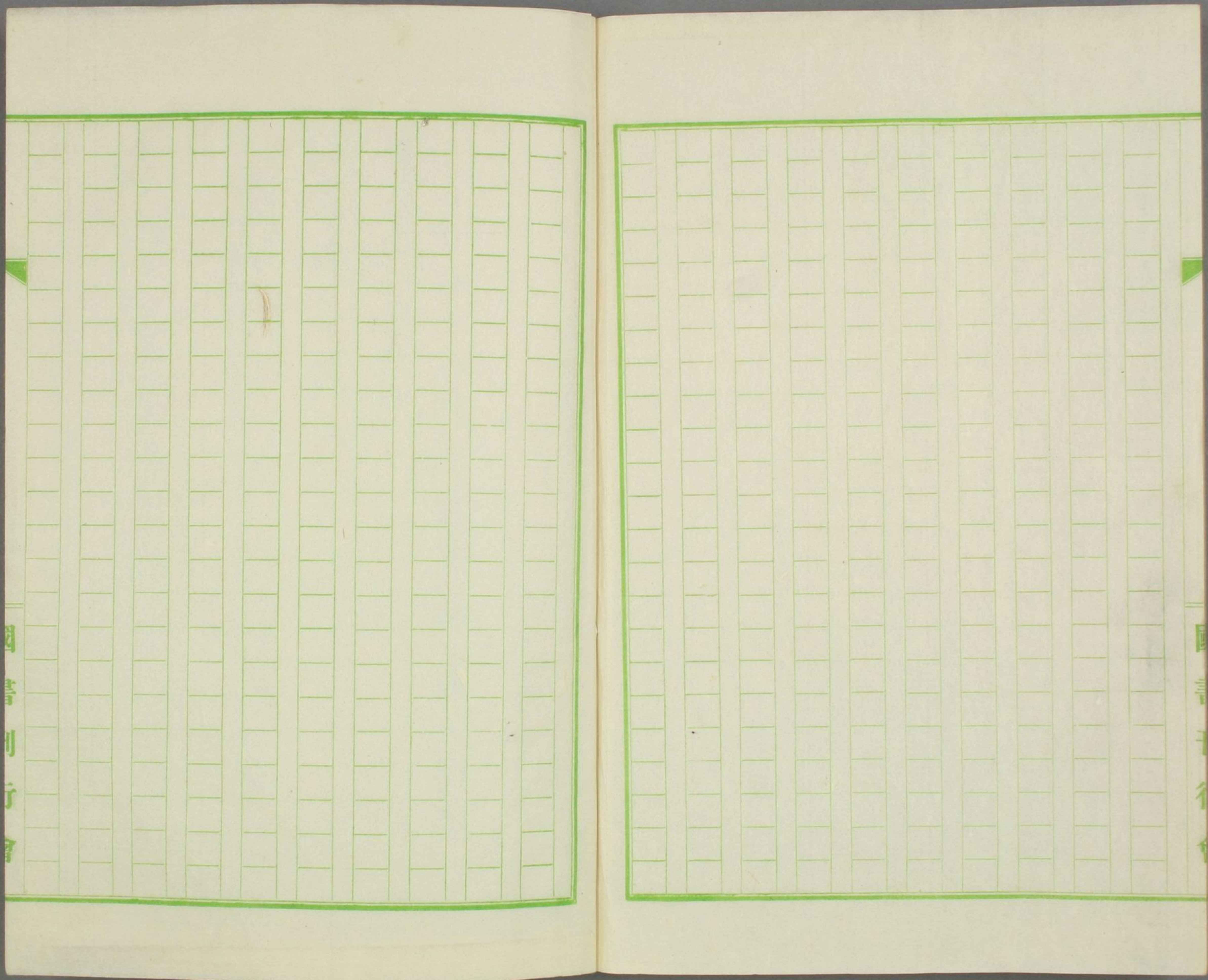
隠川、仰州、各五、大井川、
球麻、川、四、十、

二十、石川、一、石川、

石川、二十、石川、一、石川、

國書刊行會

國書刊行會



國
書
刊
行
會

國
書
刊
行
會

水と石との隙多し地之川の流るる所は近き

あり
漏山に於て浮舟ありて舟楫ありて舟楫あり

尚且下流に池あり

浮舟ありて舟楫ありて舟楫あり

鄭谷石門山あり

一脈清冷何所之、
慈惠河漱石解入池

